FC77
31

FC77
31

東京文理科大學教授
神保格 著

小學國語讀本朗讀法（卷一）

昂尋二後期用

武知訓導

東京文理科大學教授
神保格著

小學國語讀本朗讀法（卷四）

尋二後期用

FC77
31

49.7.31

989202

はしがき

本書も先に公にした小學國語讀本卷一・卷二・卷三と同じ趣意を以て作つたものである。

例の通り馬淵冷佑氏は各課の內容につき有益な助言を與へられ、朗讀における斷續・速度・抑揚調子の記述に參考となる點が多かつた。こゝに感謝の意を表す。

昭和九年十月

著者

小學國語讀本朗讀法（尋二後期用）目次

はしがき

序説……（一―六）

ショオガク　コクゴドクホン　マキノ　シ（本文及び解説）

イチ・フジノ　ヤマ……九

ニ・ハヤトリ……一一

サン・カイグンノ　ニイサン……一九

シ・カケつコ……二五
ゴ・カグヤヒメ……三〇
ロク・タスキノ　ハラツズミ……三九
シチ・ツキト　クモ……四一
△△
ハチ・オジサンノ　ウチ……四八
ク・ヤマガラ……五三
ジュウ・ヤマガラノ　オモイデ……五四
ジュウイチ・オオエヤマ……五七
ジュウニ・オニゴつコ……六九
ジュウサン・ユウビン……七一
ジュウシ・ニイサンノ　ニュウエエ……七八

ジュウゴ・スズメ……八三
ジュウロク・シロウサギ……八四
ジュウシチ・マメマキ……九一
△
ジュウハチ・ユリワカ……九六
ジュウク・ヒナマツリ……一〇六
ニジュウ・キタカゼト　ミナミカゼ……一〇八
△
ニジュウイチ・ハゴロモ……一一三

〔目次畢〕

小學國語讀本朗讀法（卷四）

〔尋二後期用〕

序說

本書の書き方も卷一・卷二・卷三と同じである。念のため左に說明する。

〔甲〕は一般的箇條である。どんな種類の文章でも又どんな內容を含んだ文章にも同樣に當てはまり、必ず正しくいはなければならぬものである。

(イ) 發音　現代東京語に基づき、氣を附けて發音するあらたまつた物の言ひ方を標準とする。その發音を表記する方法として片假名を使ふ。この假名は一種の發音符號である。

ガギグゲゴ　所謂鼻にかゝつた子音(ng)を含むことを示す。

ジ、ズ　舊來の假名遣のジヂは同じ發音を表し、區別が無い。ズヅも同樣區別がない。本書では之をジズで表す。

つ　促音の符號。例ミっッ「三ッ」。

シス等、左側の小三角(△)はその音節の母音が無聲化することを示す。或語句では時により無聲化したりしなかつたりするものがある。例へば

一　ココ「此處」、カカル「掛」、此の類はゆつくり發音する時無聲化しない。これらは一々本文の次のアクセント說明の項に記した。

二　「……シマイマス」「……デス」等、文の終に來る時の最後の音節「ス」「ク」「ツ」等。普通の云ひ方の時は多く無聲化するが、特に語尾をはつきり云はうとする時無聲化しない。

三　「ヨクカエッテキタ」等「ヨク」「カエッテ」の如く二つの單語を續けていふ時「ク」の母音無聲化を起す。聲を切つていふ時無聲化を起さない。その他ス「ツ」「フ」「シ」「チ」も同じ場合に無聲化を起すことがある。

これらは本文に△此の符號を附けないで置いた。

(ロ)　**アクセント**　アクセントは各單語について表記する。

(一)　起伏式　例　フジ「富士」　ハヤイ「早」　アタマカラ「頭から」等。右側の縱線はその單語の中で他の音節よりも比較的高い聲の調子で發音することが東京語の慣習であることを示す。

(二)　平板式　カラダニ「體に」、ヒロガッテ「擴」等。縱線を附けない。その單語の各音節に著しい高低を附けず、終まで調子の下らないことが慣習であることを示す。

「續き下り」(假定の名稱)例、ッカナイヨオニ(比較、別々にはッカナイ　ヨオニ)　ナッテシマイマス。(比較、別々にはナッテシマイマス。)二つの單語が連結し、之を續けていふ時、第二の單語のアクセントの高い部分が高くならない。

「續き上り」(假定の名稱)例、トブヨオニ(比較、別々にはトブ　ヨオニ)、オワライニナリマシタ(比較、別々にはオワライニナリマシタ)。平板式の單語の次に起伏式の單語が連結し之を續けていふ時、平板式の第二音節以下が高くなり、起伏式の第一音節も高くなる。

以上はアクセントに準ずべき現象である。二箇の單語が連結し、その第二の單語が「…樣に」「…てしまひます」「…になりました」等、常に他の單語の次にのみ用ひられるもの、從つて多くその二語の間で聲を切らずにいふものは此の續き下り續き上りの形をとる。しかし第二の單語の意味を強めていふ時はその單語固有のアクセントに從つていふ。此の意味で續き下り續き上りは場合毎に變化し

得るものであるから眞のアクセントでない。アクセントに準ずるものである。續き下り續き上りと同様の現象は如何なる單語の間にも起る。例、ウレシクテタマリマセン、此の二語を續けていひ、ウレシクテを強める時は「…レ…」が著しく高くなり、次の「…マリマセ…」の方はそれ程高くならない。又、ムチュウデ、ハシリマシタ、此の二語を續けていひ、ムチュウデを強める時は「…チュウデハシリ…」の様に調子が高くなる。これらは元來抑揚調子の項に入るべき現象である。前記アクセントに準ずる續き下り續き上りは、第二の單語が常に他の單語の次に連結されること、多くは續けて發音すること、多くはアクセントの型が變ること、これらの理由によつて「準ずる」といつたのである。

〔乙〕は特殊的箇條である。即ち一つ一つの文章に應じて變るものである。從つて又原文を解釋する人により、或程度までちがひを生ずることがある。甲に述べた「必ず正しく」といふ樣な嚴格な一定の規則を立てることが出來ない。しかし一つの文章は誰が讀んでも大體一定した思想感情を了解し得る筈である。本書に記したのは著者の考でなるべく總ての人の考と一致するであらうと思はれる點を述べたのである。

(イ) 斷續　單語の分別書方、句讀點との關係については本書卷三の序說四六頁參照。

一　聲を切る符號。

一、間を置く符號。

‖　休止の符號。これは必ずしも文段の終に來るとばかり限らない。

斷續隨意　この名稱を用ひた處は切つても切らなくても意味の表現に大した影響の無いことを示す。

＞　人の言葉の終。

例　アア　ヨク　カエッテ　キタネ＞ト

人の言葉を自然の調子でいふ時「ト」に移る堺で一寸聲を切る方が言ひ易い。但し「ト」は所謂テニヲハの一つで、常に上の語につゞけて發音するのが原則である。此の性質を示すため＝此の横線と區別して＞を使ふ。

以上「切る」「間を置く」「休止する」の區別は勿論比較的の區別に過ぎない。同じく「間」といつても前後の文章の關係により長い間短い間色々に變る。これ「特殊的箇條」といふ所以である。

(ロ)**速度**　一々本文の次に記した。同じ文章でも小さい室で二三人の人に聽かせる場合と、廣い室で數十數百人の人に聽かせる場合と、速度を加減する必要がある。故に本書には或一課を朗讀するに「何秒」かゝる等の絶對時間の標準を掲げない。

(ハ)**抑揚調子**　これは他の項目も同じであるが、紙上の文字では到底明かに示すことが出來ない。大體の注意を述べるだけである。

ショオガク　コクゴドクホン　マキノシ

ジンジョオカヨオ　モンブショオ

一頁　イチ　フジノ　ヤマ

二頁　アタマオ　クモノ　ウエニ　ダシ　シホオノ　ヤマオ
ミオロシテ　カミナリサマオ　シタニ　キク　フジワ

三頁　ニっポンイチノ　ヤマ　アオゾラ　タカク
ソビエタチ　カラダニ　ユキノ　キモノ　キテ　カスミノ
スソオ　トオク　ヒク　フジワ　ニっポンイチノ　ヤマ

〔甲〕

(イ) 發音　スソオ、稍速くいふ時スの母音無聲化することがある。こゝは成るべく無聲化しない樣にいふ方がはつきりして良い。

(ロ) アクセント　フジノ　ヤマ、屢、續けていふ、その時マが餘り高くならない。ウエニ、又は平板式にウエニといふこともある。意味から云つ

てウエニとウエニ(平)とは多少ちがふ意味を區別する傾向がある様に思はれる。「上部」といふ位置を表す時ウエニといひ、「上方に」といふ方向を表す時ウエニといふ。例へば「物を机の上に(上面の場處に)置く」といふ時はウエニである。「手を上に擧げる」といふ時はウエニである。但し此の區別は必ずしも嚴重ではない。ソビエタチ、別々にすればソビエ及びタチである。從つて複合した時ソビエタチの型でいふ人もある。ユキノ「ノ」が附く故にユキノ全體は平板式である。ユキ一つ離してはユキである。故にユキガ、ユキモ等である。

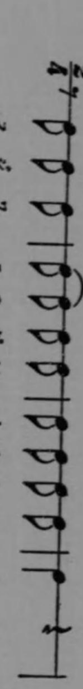
〔乙〕

(イ) **斷續**　本文表記の通りでよい。別に大して變化を附けるべき處は無い。

(ロ) **速度**　全體として稍ゆつくり云へばよい。特に變化を附けるべき處は無い。

(ハ) **抑揚調子**　フジワ　ニっポンイチノ　ヤマ　といふ句が二回繰返される。終りの方の同句を始めのよりも稍强く云ふのがよいであらう。それは朗讀の方からいつて同じ語句を二回同じ抑揚でいふ

單調を避け、此の詩全體のしめくゝりとする意味になる。この一句のリズムは稍不規則である。リズムを主としていふ時は



となり、アクセントとしてイチノヤマといふ樣な型に聞え「一の山」が異常に强く聞える。之に反し自然の言葉の抑揚調子に從つていふと、ニっポンイチノで意味が切れ、イチノの部分は弱く發音され、ヤマの方が强く發音され、二拍子のリズムが不明になる。朗讀に於ては後者自然の言葉の抑揚調子の方に從つた方がよい。

ニ　ハヤトリ

ムカシ　アル　トコロニ　イっポンノ　クスノキガ
アリマシタ　ドンナ　チカラガ　コノ　キニ

五頁

アっタノデショオ　ヒルモ　ヨルモ　グングント　ノビテ
イキマシタ‖
イツノマニカ　クスノキワ　ソノ　タカイ　コズエニ
トキドキ　クモガ　カカルホドニ　ナリマシタ‖　オオキナ
シゲっタ　エダワ　シホオニ　ヒロガっテ　ドコマデ
ツズイテ　イルノカ　ミキワメモ　ツカナイ　ヨオニ
ナリマシタ‖

六頁

マイアサ　ヒガ　デテモ　クスノキノ　ニシガワニ　アル
タクサンノ　ムラムラワ　ミンナ　ヒカゲニ　ナリマス‖
マタ　ユウガタ　チカク　ナルト　ヒガシノ　ホオノ

七頁

ムラムラモ　スっカリ　ヒカゲニ　ナっテ　シマイマス‖
ソコデ　ムラムラノ　ヒトタチガ　ソオダン　シテ　アノ
クスノキオ　キリタオシテ　シマオオト　ユウ　コトニ
ナリマシタ‖
コンナ　オオキナ　キノ　コトデスカラ　キルノモ
タイヘンデシタ‖　ナンジュウニン　ナンビャクニンノ
キコリガ　アツマっテ　マイニチ　マイニチ
オオサワギオ　シテ　ヤっト　キリタオシマシタ‖
コンドワ　キリタオシタ　キオ　ドオシタラ　ヨイカト
ユウ　コトニ　ナリマシタ‖　スルト　アル　チエノ　アル

八頁

オジイサンガ　イイマシタ　コノ　キオ　クリヌイテ
フネオ　ツクっタラ　ドオダロオ　ナルホド　ヨイ
カンガエダ>ト　ミンナガ　イイマシタ
ソコデ　オオゼエノ　ダイクオ　アツメテ　フネヲ
ツクリニ　カカリマシタ　ソオシテ　ナガイ　アイダ
カカっテ　トオトオ　イっソオノ　フネオ
ツクリアゲマシタ

九頁

イヨイヨ　ウミニ　ウカベテ　ミマスト　イママデ　ミタ
コトモ　キイタ　コトモ　ナイ　オオキナ　フネデシタ
ソオシテ　オオゼエノ　センドオガ　ノリコンデ　エイヤ

十頁

エイヤト　コギマシタガ　オドロイタノワ　ソノ
フネノ　ハヤイ　コトデシタ
センドオタチガ　カイオ　ソロエテ　ヒトカキ　ミズオ
カキマスト　フネワ　ナナツノ　オオナミオ　ノリキっテ
マルデ　トリノ　トブ　ヨオニ　ハヤク　ハシルノデシタ

十一頁

ミテ　イタ　ヒトタチワ　ナント　ユウ　ハヤイ
フネダロオ　フシギナ　フネダ>ト　イイマシタ　スルト
アノ　チエノ　アル　オジイサンガ　イヤ　フシギデモ
ナンデモ　ナイ　アノ　グングント　ノビテ　イっタ
クスノキダ　ソノ　チカラガ　ノリウツっタノ　ダロオ

トリノ　ヨオニ　ハヤイカラ　ハヤトリト　ユウ　ナオ
ツケヨオ>ト　イイマシタ『』
ソノ　ノチ　ハヤトリワ　タクサンノ　コメヤ　ムギヤ
クダモノオ　ツンデ　ミヤコノ　ホオエ　タビタビ
カヨイマシタ『』　ヒカゲニ　ナっテ　コマっテ　イタ
ムラムラモ　ソレカラ　ダンダン　ユタカニ　ナっテ
イっタト　ユウ　コトデス『』

〔甲〕

(イ) 發音　ハヤトリ、ドリの様なドの「濁音」は使はないことにする。グングント、グは二つとも鼻にかゝらないgの音である。オオゼエ、日常の言葉でオオゼイといはない、此處はそれに從ふ。ウミニ、これはンミニ(m mi ni)ではない。エイヤ、これは唯の掛け聲であつて、自然に出

る聲は必ずしも「エ」「イ」「ヤ」とはつきり發音すとは限らない。故にエヤとかエンヤとかに近く聞えることもあらう。こゝは力を入れるといふ心持を表すため、エイヤと「イ」を發音し、キレエ、オオゼエ等の例に從はないでよい。

(ロ) **アクセント**　續き下りの例、アルトコロニ、ノビテイキマシタ、ツカナイヨオニ、ナっテシマイマス、ミタコトモ、ハヤイコトデシタ、ノリウツっタノダロオ。アっタノデショオ、デショオを獨立の一單語として發音する時はデシ|ョオといふ型を使ふ。こゝはショを高くしない方がよい。ヒルモ　參考、ヒル「蛭」「干る」。ヨル「夜」「選る」　參考、ヨル(平)「寄る」。ノビテ比較、ノビル。イツノマニカ又はイツノマニカともいふ。(本書卷一、五六頁、卷二、六四頁參照。)ユウコトニ(六頁末行、七頁六行)、又は續けてユウコトニともいふ。キイタ　コトモ、又は續けてキイタコトモともいふ。

〔乙〕

(イ) **斷續**　『切りたふしてしまはう。』と』の「と」の前で切らない方がよい。誰かが口に出して言つた言葉でなく相談決定事項としていふのである。『大さわぎをして』(七頁)の終で切つてもよい。『今まで見たこ

とも』の次は切らない方がよい。『聞いたこともない』の次は斷續隨意。『えいやえいやと』の「と」の前は切らない方がよい。『のりうつったのだらう』(十一頁)の次は少し休止を置く。話題が變るからである。

(ロ) **速度**　えいやえいやはゆつくりといふ方がよい。その他特に變化を附けるべき處は無い。

(ハ) **抑揚調子**　強める語句。『くすの木が』(四頁)『ぐんぐんと』『雲がかゝる』『見きはめもつかない。』

二語共に同樣に強める語句、『高いこずゑに』高いだけを強めてはよくない。

強める語句、『舟を』(八頁)『見た』『聞いた』(九頁)次の『大きな』は餘り強めない方がよい。

『早いこと』(十頁一行)を特に強める。『七つの大波』『鳥のとぶやう』を強める。

『何と』『ふしぎな』を強める。『のりうつった』を強める。

調子『あったのでせう』(四頁)の終は尻下り。

十三頁

『どうだらう』(八頁)尻下り。

『早い舟だらう』(十頁)尻下り。

『のりうつったのだらう』尻下り。

サン　カイグンノ　ニイサン

ポクガ　ベンキョオシテ　イルト　クツノ　オトガ　シテ

ダレカ　ウチエ　ハイッテ　キマシタ　デテ　ミルト

カイグンノ　ニイサンデシタ

ニイサンワ　ニコニコ　シナガラ　ザシキエ　アガッテ

オトオサンニ　ゴアイサツオ　シマシタ　ウラノ

ハタケニ　イタ　オカアサンモ　カケテ　キテ

十四頁

アタマカラ　テヌグイオ　トリナガラ　アア　ヨク
カエっテ　キタネ>ト　ウレシソオニ　オっシャイマシタ
ニイサンワ　マエヨリモ　ズっト　イロガ　クロク
ナっテ　ツヨソオニ　ミエマシタ　オカアサンガ
オチャオ　イレテ　ホントオニ　シバラクダっタネ　マア

十五頁

ヒトツ　オアガリ>ト　オっシャイマシタ　ニイサンワ
オイシソオニ　ノミマシタ　ボクワ　ウレシクテ　ソノ
マワリオ　トビアルキマシタ
ニイサンワ　イサム　オオキク　ナっタネ　イイ　コニ
ナっタ>ト　イイマシタ　ボクモ　オオキク　ナっタラ

十六頁

カイグンダヨ　ニイサン>ト　ユウト　ソオダ
カイグンガ　イイ　ダイジョオブ　ナレルヨ>ト
ニイサンワ　ボクノ　アタマオ　ナデテ　クレマシタ
ボクワ　ウレシクテ　タマリマセン
ニイサンノ　ボオシオ　カブルト　オトオサンガ

十七頁

カワイラシイ　カイグンダナ　ボオシノ　オバケノ
ヨオダ>ト　イっテ　オワライニ　ナリマシタ
ボオシニワ　キンデ　ジガ　カイテ　アリマシタ　ダイ
ニっポン　グン　ソレカラ　ナント　ヨムノ>ト

十八頁

キキマスト　ニイサンワ　ダイ　ニっポン　グンカン

カガ＞ト　オシエテ　クレマシタ‖

オフロニ　ハイっテカラ　ミンナ　イっショニ　ゴハンオ

イタダキマシタ‖　ニイサンワ　ゴハンオ　タベナガラモ

シジュウ　ニコニコシテ　イマシタ‖　ソオシテ

グンカンヤ　ヒコオキノ　オモシロイ　ハナシオ

イロイロト　シテ　クレマシタ‖　ニイサンノ　ノっテ

イル　カガワ　タクサンノ　ヒコオキガ　ノセテ　アっテ

ソレガ　ヒロイ　カンパンノ　ウエカラ　ジユウニ

トンデ　イクノダ　ソオデス‖　グンカント　イっテモ

カガナドワ　ウゴク　ヒコオジョオノ　ヨオナ

十九頁

二十頁

モノデスネ＞ト　イっテ　ニイサンワ　ワライマシタ‖

オトオサンワ　ホオ　ホオト　イイナガラ　カンシンシテ

キイテ　イラっシャイマシタ‖

ネルトキニワ　ボクワ　ニイサント　ナランデ　ネマシタ‖

〔甲〕

(イ) **發音**　ウレシソオニ、オイシソオニ、稍速くいふ時シの母音無聲化を起すことがある。こゝは無聲化しない様にいふ方がはつきりして良い。ダイジョオブ、日常の言葉ではダイジョブとジョを短くいふことが多い。

(ロ) **アクセント**　續き下りの例、ハイっテキマシタ、デテミルト、カケテキテ、クロクナっテ、ナデテクレマシタ、オバケノヨオダ。

續き上りの例、オワライニナリマシタ、オシエテクレマシタ、ノセテアっテ、トンデイクノダ。

ボク、又はボクと平板式にいふ事も多い。ウチエ、この場合ウチエと

はいはない。

ウラノ、ノが附くから平板である。他の場合はウラ|、ウラ|ニ、ウラ|デ等である。

アア、アクセント不定。イサム、男兒の名は常に平板式である。ゴ|ハンオ、又はゴ|ハンオといふ人もある。ホオ、アクセント不定。ネル|トキ|ニハ、別々にはネル(平)トキ|ニワである。從つて續けてネル|トキ|ニワといつてもよい。

〔乙〕

(イ) 斷續 『べんきやうしてゐると』の次で切る。『音がして』の次は斷續隨意。二十頁『軍かんといつても加賀などは』と續けてその次で切つてもよし、『いつても』の次で切り、『加賀などは動く…』と續けてもよい。

(ロ) 速度 十七頁末行『大日本、軍』一字一字拾ひ讀みするので、そのつもりで稍遲くいふ、十八頁、兄の敎へる言葉『だいにつぽん……』も多少遲くいふ。

(ハ) 抑揚調子 『よくかへつたね』『しばらくだつたね』『大きくなつたね』の

二十一頁

「ね」は一べん上つて直ぐ下る調子。『ずつと』を强める。『まあ一つ』のまあを稍强めてよい。その時は詳しい話などは後にして先づお茶を』といふ樣な心持を表す。『おあがり』の終は尻下りの調子。『海軍だよ』の終は尻上りにし『にいさん』の終は尻下りにいふ。『大ぢやうぶなれるよ』の終は尻下りにいふ。『かはいらしい海軍だな』の「な」は一べん上つて直ぐ下る調子。『金で字が』は『字が』の方を强める。『何と讀むの』の終は尻上りの調子、子供の言葉で疑問を表す。『ひろい』『かんばん』を共に强める。『じいうに』を强める。『動く』『ひかうぢやう』を共に强める。『……ものですね』の「ね」も一べん上つて直ぐ下る調子。『ほう、ほう』といふ感嘆の聲は多少長く延し終を尻上りにいつてよい。

シ| カケ|つコ

イチ|ネンセエノ ハタ|トリガ スン|デ イヨ|イヨ

ボクタチ　ニネンセエノ　カケっコニ　ナリマシタ
ボクワ　ムネガ　ドキドキシテ　キマシタ
ボクタチ　シチニンワ　シュっパツセンニ

二十二頁

ナラビマシタ　ヨオイ>ト　センセエノ　コエ　ドン
キクガ　ハヤイカ　カケダシマシタ　ソノウチニ
フタリガ　ボクノ　マエエ　ヌイテ　デマシタ　マケル
モノカ　ボクワ　イっショオケンメエニ　ハシリマシタ

二十三頁

シっカリ　ハヤク　ハヤク　オオエンノ　コエモ
ゴチャゴチャニ　ナっテ　キコエマス　モオ　ナニモ
ミエマセン　ボクワ　ムチュウデ　ハシリマシタ　スルト

ナニカニ　ツマズイテ　ヒドク　コロビマシタ

二十四頁

シマっタ>ト　オモイナガラ　スグ　ハネオキマシタ　ガ
モオ　ミンナカラ　スっカリ　オクレテ　シマイマシタ
ヨソオカト　オモイマシタ　シカシ　オトオサンガ
マケテモ　ヨイカラ　シマイマデ　ハシル　モノダ>ト
オっシャっタノオ　オモイダシテ　マタ
イっショオケンメエニ　ハシリマシタ　ワア>ト　テオ

二十五頁

タタイテ　ワラっテ　イル　モノモ　アル　ヨオデシタ
キマリガ　ワルイト　オモイナガラ　ボクワ
ケっショオセンマデ　ハシリマシタ　スルト　センセエガ

二十六頁

ニコニコシテ　タロオクン　エライゾ』　コロンデモ
ヨク　シマイマデ　ハシっタ』　カンシン　カンシン〉ト
イっテ　ホメテ　クダサイマシタ』

〔甲〕

(イ) 發音　シュっパッセンのシュの母音を無聲化しないで發音する方がはつきりする。但しッの母音を有聲にいふは可笑しいであらう。マエエ、エが二つ續くため東京其の他の俗語でマイエの樣にいふことが屢ある。こゝはエを二つ續けていふ方がよいであらう。ハネオキマシタ　ガ、このガは元來前の語に續けていふのが常である。こゝは臨時に前の語から離していふ。しかしやはり「ガ」のŋgの鼻音を使ふ。ハシっタ、こゝはシの母音を有聲に發音する樣表記した。その方がはつきりして良い。但し日常の語で屢ハシっタとシの母音が無聲化する。その時アクセントの型はハシっタといふ。

(ロ) アクセント　續き下りの例、ドキドキシテキマシタ、ハシルモノダ、アルヨオデシタ。

續き上りの例、ヌイテデマシタ、マケルモノカ、オクレテシマイマシタ、キマリガワルイ。

ボクタチ、ボクを平板式にいふ人はボクタチの型を使ふのが常である。ドン、アクセント不定。キクガ「菊が」といふ語と同じ型である。マケルモノカ、俗語でマケルモンカといふ。その時アクセントはマケルモンカといふ。ナニモ、又はナニモともいふ。ワアト、アクセント不定。イルモノモ、續けてイルモノモといふ事もある。ハシっタ、アクセントについて前出發音の條參照。

〔乙〕

(イ) 斷續　『並ビマシタ』—『ヨウイ』の間は休止を置くとよい、號令を待つ緊張の氣持を表す。『ドン』の次は間を置かない「聞くが早いか」かけ出したからである。此處から原讀本二十四頁二行『オクレテシマヒマシタ』あたりまでは、間や休止(＝＞の符號の所)を極めて短くする。息づまる樣な競走の氣持を表す。ヨサウカトの「ト」の前は切らない方がよい、單に思つただけだからである。『手ヲタ、イテ』

の次は切らない方がよい。

(ロ) **速度** 始めから『ヨウイト先生ノコヱ』まではやゝゆつくりいふ。次の競走の光景は必ずしも速度を早めないでよい、その代り文の終りの間や斷續を短くすることに依つて切迫した氣持を表すことが出來る筈である。『シマッタ』はやゝ速くいつてよい、

(ハ) **抑揚調子** 『イョイョ』を強める。『ヨウイ』は長く延ばしていつてよい。『負ケルモノカ』『シッカリ』『早ク早ク』は特に力を入れていふ。『ムチウデ』を強める。『エライゾ』『ヨク』を強める。

二十七頁

ゴ　カグヤヒメ

タケトリノ　オキナト　ユウ　オジイサンガ　アリマシタ

マイニチ　タケオ　キッテキテ　ザルヤ　カゴオ

コシラエテ　イマシタ

二十八頁

アルヒノ　コト　モトノ　ホオガ　タイソオ　ヒカッテ

イル　タケオ　イっポン　ミツケマシタ　ソレオ　キっテ

ワっテ　ミマスト　ナカニ　チイサナ　オンナノコガ

イマシタ　オジイサンワ　ヨロコンデ　テノヒラエ

ノセテ　カエリマシタ　ソオシテ　オバアサント

フタリデ　ソダテマシタ　チイサイノデ　カゴノ　ナカエ

イレテ　オキマシタ

コノコオ　ミツケテカラ　オジイサンノ　キル

タケカラワ　イツモ　オカネガ　デテ　キマシタ　ソレデ

オジイサンワ　ダンダン　オカネモチニ　ナリマシタ

二十九頁

三十頁

コノコワ　ズンズン　オオキク　ナっテ　ミツキホド
タツト　ジュウゴロクグライノ　ウツクシイ　ムスメニ
ナリマシタ　オジイサンワ　コノコニ　カグヤヒメト
ユウ　ナオ　ツケマシタ
ソノウチニ　セケンノ　ヒトビトワ　カグヤヒメノ
コトオ　キイテ　ジブンガ　ムコニ　ナロオ
ワタクシノ　ヨメニ　クダサイト　モオシコミマシタガ
カグヤヒメワ　ドオシテモ　ショオチ　シマセン
オジイサンモ　ジブンノ　ホントオノ　コデ　ナイカラ
ワタクシノ　オモウ　ヨオニワ　ナリマセン>ト　イっテ

三十一頁

イマシタ　ノチニワ　トノサマカラ　オクガタニ
シタイトノ　オコトバモ　アリマシタガ　カグヤヒメワ
ソレモ　オコトワリ　イタシマシタ
コオシテ　ナンネンカ　タチマシタ　アルトシノ
ハルノ　コロカラ　カグヤヒメワ　ツキノ　アカルイ
バンニワ　ツキオ　ナガメテ　ナニカ　カンガエテ
イル　ヨオデシタ　ハチガツ　ジュウゴヤチカク　ナルト、
コエオ　タテテ　ナイテバカリ　イマシタ
オジイサンヤ　オバアサンガ　ナゼ　ナクノカト
キキマスト　カグヤヒメワ　ワタクシワ　モト　ツキノ

三十二頁

三十三頁

ミヤコノ　モノデ　ゴザイマス　ナガイ　アイダ
オセワニ　ナリマシタガ　コノ　ジュウゴヤニワ　ツキノ
セカイカラ　ムカエニ　マイリマスノデ
カエラナケレバ　ナリマセン　ミナサンニ　オワカレ
スルノガ　ツラクテ　ナイテ　イルノデ　ゴザイマス>ト
イイマシタ　オジイサンワ　オドロイテ　ソレワ
タイヘンダ　ムカエニ　キテモ　ワタス　モノカ>ト
イイマシタ
オジイサンワ　ナントカシテ　カグヤヒメオ
ヒキトメタイト　オモイマシタ　ソオシテ　コノ

三十四頁

コトオ　トノサマニ　モオシアゲマスト　トノサマワ
ソレデワ　ソノ　バンニワ　ヘエタイオ　タクサン
ヤっテ　ツキノ　ミヤコノ　ツカイガ　キタラ
オイカエシテ　シマオオ>ト　オっシャイマシタ
イヨイヨ　ジュウゴヤノ　バンニ　ナリマシタ
オジイサンノ　イエノ　マワリワ　ヘエタイガ
イクエニモ　トリマキマシタ

三十五頁

ヨナカゴロニ　ナルト　キュウニ　オツキサマガ　トオモ
デタカト　オモウ　ヨオニ　アタリガ　アカルク
ナリマシタ　サア　キタゾ>ト　ヘエタイタチワ　ユミニ

三十六頁

ヤオ　ツガエヨオト　シマシタガ　メガ　クランデ
ドオスル　コトモ　デキマセン『ソノトキ　タクサンノ
テンニンガ　クモニ　ノっテ　オリテ　キマシタ』
カグヤヒメモ　イマワ　シカタガ　ナク　ナイテ　イル
オジイサント　オバアサンニ　ムカっテ　イマ　オワカレ
モオス　コトワ　マコトニ　カナシュウ　ゴザイマスガ
イタシカタガ　アリマセン『ツキヨノ　バンニワ
ドオカ　ワタクシノ　コトオ　オモイダシテ　クダサイ』
ワタクシモ　オフタカタノ　ゴオンワ　ケっシテ
ワスレマセン>ト　イっテ　テンニンノ　ヨオイシテ

三十七頁

キタ　クルマニ　ノっテ　ソラエ　ノボっテ　イっテ
シマイマシタ』

〔甲〕

(イ) 發音　オモウヨオニワ(原三十頁五行三十五頁一行)特に力を入れない時「オモオ」となることが多い。

(ロ) アクセント　續き下りの例、アルヒノコト、デテキマシタ、オオキクナっテ、オモウヨオニ、オリテキマシタ。

續き上りの例、コシラエテイマシタ、モトノホオガ、ワっテミマスト、ショオチシマセン、オワカレスルノガ、ナイテイルノデ、ワタスモノカ、ドオスルコトモ。

モトノ「基」の意の時常に平板式である。モトノの型は「原」の「舊の」の意である。オカネモチニ、又は平板式にもいふ。セカイ又はセカイといふ人もある。コノコトオ、續けてはコノコトオともいふ。ツガエヨオト、又は平板式にもいふ。ドオスルコトモ、又はドオスルコトモ、ドオ……の様にいふ事は殆ど無いであらう。

〔乙〕

(イ) **斷續**　『それを切って』の次は切らない方がよい。『おぢいさんは』の（三十三頁五行）次で切る。『急に』（三十四頁末行）の前後で切る方がよい。『急に』は『あかるくなる』にかゝるからである。『さあ』の次は切らない。『かなしうございますが』（三十六頁末行）の次は間をやゝ長く置くとあきらめの感情を表すによいであらう。

(ロ) **速度**　三十二頁『私はもと月の都……』といふ言葉はやゝ遲くいふ、悲しみの心のこもる事を表す。之に對照し『それは大へんだ……』といふおぢいさんの言葉はやゝ速くいつてよい。『さあ來たぞ』もやゝ速くいふ。最後の姫の言葉『今お別れ申すことは……』もやゝ遲くいふ。

(ハ) **抑揚調子**　『女の子が』（二十七頁末行）を強める。『お金が』（二十八頁七行）を強める。『それも』（三十頁末行）を強める。『わたすものか』（三十三頁三行）を強める。『追ひかへして』（三十四頁三行）を強める。『十も』（三十五頁一行）を強める。『さあ』を強める。

三十八頁

ロク　タヌキノ　ハラツズミ

三十九頁

サア　サア　アツマレ　ツキガ　デタ　ミンナデ
ツズミノ　ウチクラダ　オヤマノ　ウエデワ
オヤダヌキ　ポンポコ　アイズノ　ハラツズミ　ヤブノ
カゲカラ　コカゲカラ　ヌっクリ　ヌっクリ　コダヌキガ
デテキテ　オヤマエ　アツマっテ　ズラリト　ナランデ
ワニ　ナっタ
ソラニハ　マルイ　オツキサマ　ポっカリ　ウカンダ

四十頁

シロイ　クモ　ツキニ　ウカレテ　ハラツズミ

ポンポコ　ポンポコ　ウチダシタ‖

〔甲〕

(イ) 發音　特に記すべきことなし。

(ロ) アクセント　續き下りの例　ワニナッタ。

デテキテ、別々にはデテキテである。これは續き下りの一例と見てよい。

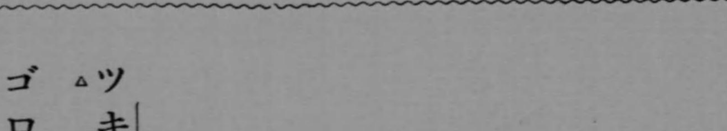
〔乙〕

(イ) 斷續　本文表記の外、第二節コダヌキガの次、第三節ハラツヅミの次いづれを切つてもよい。後にいふ様に此の課はリズムを規則正しく云つて良いから、各句各文の終りの間及び休止を同じ長さにしてよいであらう。

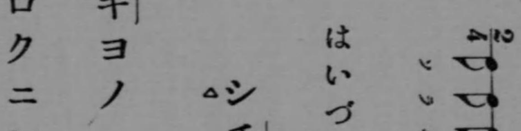
(ロ) 速度　特に變化を附けるべき處無し。

(ハ) 抑揚調子　此の課はリズムをわざと規則正しくいふ方が面白いであらう。すべて

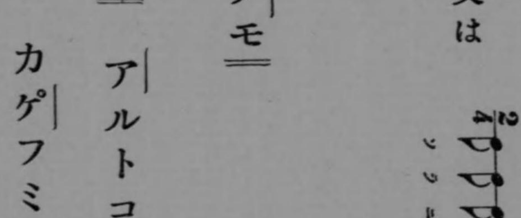
の様に二拍子にいふ。但し



この二句だけは始めに1/8の休止が入る。又



又は



はいづれでもよい。

シチ‖　ツキト　クモ‖

ツキヨノ　バンデシタ‖　アルトコロデ　コドモタチガ

ゴロクニン　アツマッテ　カゲフミオ　シテ　アソンデ

イマシタ‖

四十二頁

ソノウチニ　ツキニ　クモガ　カカリマシタ　ツキワ
クモニ　ハイっタカト　オモウト　スグ　デタカト
オモウト　スグ　マタ　ハイリマス　コオ　ナっテワ
カゲフミモ　デキマセン　コドモタチワ　アソブ
コトオ　ヤメテ　シバラク　ツキオ　ミテ　イマシタ
スルト　ヒトリノ　コドモガ　イイマシタ　アレワ
オツキサマガ　ハシっテ　イルノダロオカ　クモガ
ハシっテ　イルノダロオカ　ツキワ　イマ　クモカラ
デテ　オオイソギデ　ハナレテ　イキマス　ソオシテ
ツギノ　クモノ　ホオエ　ドンドン　ハシっテ　イキマス

四十三頁

オツキサマガ　ハシっテ　イルノダヨ>ト　ヒトリノ
コドモガ　イイマシタ　シカシ　ジっト　ツキオ
ミツメテ　イマスト　ツキワ　ウゴカナイデ　クモガ
オオイソギデ　トンデ　イク　ヨオニモ　ミエマス
ソレデ　オツキサマデワ　ナイ　ハシっテ　イルノワ
クモダ>ト　ユウ　コドモモ　アリマシタ　ソレカラ
シバラクワ　ツキガ　ハシル　クモガ　ハシル>ト
タガイニ　イイハっテ　イマシタ
ミンナガ　ワイワイ　ユウノオ　ハジメカラ　ダマっテ
キイテイタ　ヒトリノ　コドモガ　アリマシタ　ソノ

四十四頁

コドモワ　コノトキ　ミンナカラ　ハナレテ　マエノ
ホオニ　アル　キノ　ソバエ　イキマシタ　ソオシテ
シバラク　エダゴシニ　ツキチ　ミテ　イマシタガ
ココエ　キタマエ　クモガ　ハシルカ　オツキサマガ
ハシルカ　ヨク　ワカルヨ>ト　イイマシタ　ミンナ
キノ　ソバエ　キマシタ　ココニ　タっテ　オツキサマオ
エダノ　アイダカラ　ミタマエ>ト　ソノ　コドモガ
イイマシタ

四十五頁

ソノ　トオリニ　ミンナガ　シテ　ミマシタ　スルト
ツキワ　エダノ　アイダニ　ジっトシテ　イマスガ

四十六頁

クモワ　サっサト　ハシっテ　イキマス　ワカっタ
ワカっタ　ハシっテ　イルノワ　クモダ　クモダ>ト
ミンナガ　イイマシタ

〔甲〕

(イ) 發音　カカリマシタ、稍速くいふ時始めのカに母音無聲化を起すことがある。こゝは無聲化しない様にいふ方がよい。ハシっテ、シに母音無聲化を起すことが多い。こゝは無聲化しない方を採用した。ココエ、これも稍速くいふ時始めのコに母音無聲化を起すことがある。これも無聲化しない様にいふ方がよい。

(ロ) アクセント　續き下りの例、ミテイマシタ、ハナレテイキマス、クモノホオエ、イイハっテイマシタ、ジっトシテイマスガ。

續き上りの例、アソンデイマシタ、コオナっテワ、ミツメテイマスト、ソノトオリニ、シテミマシタ。

アルトコロデ、別々にはアル、トコロデである。續き下りの一例と見

てよい。スグ、デ、デはデル、デテの様に次に音節が續くと起伏式の高い部になる。こゝは一音節だけの語であつて、實地に發音する時はアクセントがはつきり顯れない。アソブ、コトオ、續けてはアソブコトオ、ともいふ。ハシつテ、シに母音無聲化を起す時はハシつテとなる。此の時次の語と續いて、ハシつテイル、ハシつテイキマス、ハシつテイキマス、の様な續き下りの形になる。イルノダロオカ、ダロオを強くいふ時はダロオの型にいふが、こゝは強くいはない。キイテイタ、別々にはキイテ、イタと共に平板式である。從つて續けてもキイテ、イタと全部を平板式にいつてもよい。原讀本卷二、三頁ウイテイタ、ウイテイタ、本書卷二、一四頁參照。ミンナ、副詞的の使ひ方の時は平板式である。「總ての人々」の様に名詞の時はミンナガ、ミンナワである。サつサト又はサつサト、いづれも同様に行はれる。

〔乙〕

(イ) **斷續** 『はいったかと思ふと』の次、『出たかと思ふと』の次は切らない方がよい。『今雲から出て』(四十二頁六行)の次も切らない方がよい。

(ロ) **速度** 四十三頁一行の『お月様が走つてゐるのだよ』は稍速くいつてよい。後の一人の子供の言葉『こゝへ來たまへ……』『こゝに立つて……』(四十五頁)は稍ゆつくりいふとよい。その子供の落附いて觀察し斷言する態度を表す。

(ハ) **抑揚調子** 此の課は月と雲と對照して論ずるためその各の語を特に强めていふべき例が多い。例へば四十二頁三行『お月様が』四行『雲が』四十三頁一行『お月様が』—四行『雲が』、同七行『雲だ』、四十四頁一行二行『月が』『雲が』、四十五頁三行四行、四十六頁六行七行『雲だ』の如し。『大急ぎで』『どん〳〵』を强める。『月は動かないで』(四十三頁四行)の『月は』は特に强めない。四十六頁三行四行の『月は』『雲は』も强めない。

調子の方からいふと、四十二頁『走つてゐるだらうか』の終は尻下り四十三頁一行『……ゐるのだよ』の終も尻下り。四十五頁四行『よくわかるよ』の終は尻上り。

四十七頁

ハチ　オジサンノ　ウチ

カワヒトツ　ムコオノ　ムラニ　オジサンノ　ウチガ
アリマス　キノオ　ワタクシワ　オカアサンノ
オツクリニ　ナっタ　オハギオ　モっテ　オツカイニ
イキマシタ

四十八頁

オジサンノ　ウチデワ　ニワ　イっパイ　モミガ
ホシテ　アっテ　アシノ　フミバモ　ナイ　クライデシタ
ウチノ　ヒトワ　ミンナ　ルスデ　オバアサン　ダケガ
ヒアタリノ　ヨイ　エンガワデ　ツギモノオ　シテ

四十九頁

イラっシャイマシタ
オバアサンワ　ミミガ　トオイノデ　ワタクシガ
オオキナ　コエデ　オバアサン　コンニチワ>ト　ユウト
フリカエっテ　オオ　マサチャンカ　ヨク　キタネ>ト
オっシャイマシタ
ワタクシガ　オハギノ　ツツミオ　オワタシスルト
オバアサンワ　ソレワ　アリガトオ>ト　イっテ
オウケトリニ　ナリマシタ　ソオシテ　ユデタ　クリオ
オボンニ　イっパイ　モっテキテ　クダサイマシタ
ニワトリガ　キテ　ムシロニ　ホシテ　アル　モミオ

五十頁

トキドキ　カキチラシマス　オバアサンガ　ホオ
ホオ>ト　イっテ　オオイニ　ナリマスト　ニワトリヨリ
サキニ　スズメガ　ニゲテ　イキマス
モオ　カエリマス>ト　ワタクシガ　イイマスト
オバアサンワ　キョオワ　コンナニ　モミガ　ホシテ
アルカラ　オジサンモ　オバサンモ　ハヤク　カエルヨ
モっト　アソンデ　オイデ>ト　イっテ　オトメニ
ナリマシタ　シカシ　ワタクシワ　オソク　ナルト
オモっテ　イタダイタ　クリオ　モっテ　カエリマシタ

〔甲〕

(イ) 發音　オワタシスルト、シに母音無聲化が起り易い。こゝは無聲化

しない様に發音する方がはっきりして良い。

(ロ) **アクセント**　續き下りの例、ホシテアっテ、ナイクライデシタ、ホシテアル、ニゲテイキマス。

續き上りの例、オックリニナっタ、オオイニナリマスト、オトメニナリマシタ、オソクナルト。

ウチ、之は又ウチと平板式にいふこともある。從つてウチガ、ウチデワといふ。

ニワ、イっバイ、又は續けてニワイっバイともいふ。モミ、平板。參考、モミ、「樅」「紅絹」。オオ、アクセント不定。ユデタ比較ユデル。イっバイ、こゝは「充滿」の意で、平板式、「一杯」といふ分量の單位の意の時は、イっバイである。モっテキテ、時にモっテキテといふ人もあるが、モっテキテの方が日常生活に普通多く用ひられる。ムシロ。參考、ムシロ「寧ろ」。ホオホオ、アクセント不定。モっテカエリマシタ、時に續けてモっテカエリマシタといふこともあるが、これは「歸る」といふ意義の方が強い。特に「持つて」「携へて」の意をいふ時はモっテである。故に「手に携へて

來る」といふ樣な意の時はモ｜ッテ｜クルである。

〔乙〕

(イ) 斷續　『村に』の次は斷續隨意。『オカアチンノオ作リニ』云々が長いから、その前の『私は』の次で切る。『エンガワデ』の次は切らない方がよい。『サウシテ』(五十頁一行)の次で切つて、『ユデタ栗ヲ』ノ次は切らない方がよい。『ソウシテユデタ栗ヲ』と續けてその次で切ると、「斯の如き方法でゆでた」といふ樣な意味に聞える恐がある。モミオ(五十頁五行)の次は切らない方がよい。

(ロ) 速度　此の課は兒童の言葉と老人の言葉の對照を速度によつて表すことが大切である。

(ハ) 抑揚調子　『オハギヲ』を稍强める。『フミバモ』を强める。『ルスデ』を强める。『オバアサンダケガ』こゝはダケを稍强めてよい。『正チャンカ』の終は尻下り。『來タネ』の終は一べん上つて直ぐ下る調子。『スズメガ』を强める。『早クカヘルヨ』の終は尻上り。『アソンデオイデ』の終は尻上りでも下りでもいづれでもよい。

五十二頁

五十三頁

ク　ヤマガラ

ヤマ｜デ　ハタ｜オル　ヤマガラワ｜　キ｜ョオモ　ア｜サカラ
トントン　カラリ　マ｜ツノ　コエダオ　エダカラ
エダエ　トンデ　ウツ｜ッテ　トントン　カラリ　ア｜サニ
イ｜っタン　ツズイテ　ニ｜タン｜　ヒニワ　ハ｜っタン｜
トントン　カラリ

〔甲〕

(イ) 發音　ウッッテ、ツに母音無聲を起すことがある。こゝは無聲化しない方がよい。

(ロ) アクセント　ヤマガラ、常に平板式である。ハタオル、こゝは口調のため續けていふ型を表記した。別々にはハタ｜オルである。ハタ｜機」「旗」。參考、ハタ(平)「端」、ハタ「將」、但しハタ「畑」はアクセント不確である。

ハタ「畑」といふ語は日常使はない、通常ハタケ(平)といふからである。トントンカラリ、アクセント不定。強ひて型を附ければ、トントン、カラリ、又はトントンカラリであらう。

〔乙〕

(イ) 斷續　本文表記の切り方が一例である。

(ロ) 速度　此の課は全體として成るべくゆつくりいふ方がよいであらう。「枝から枝へ飛び移る」敏速な動作もゆつくりした速度でいつて必ずしも矛盾しないであらう。

(ハ) 抑揚調子　特にいふべきこと無し。

五十四頁

ジュウ　ヤマガラノ　オモイデ

ワタクシノ　ウチニ　ヤマガラガ　イチワ　カっテ
アリマシタ　タイソオ　ヨク　ナレテ　ワタクシノ
テカラ　エオ　タベル　ホドニ　ナっテ　イマシタ

五十五頁

ソレガ　カワイソオニ　アル　バン　ネズミニ　アシノ
ユビオ　クイキラレマシタ　ドンナニカ　ナイタノ
デショオガ　ウチノ　モノワ　アサマデ　シラズニ
イマシタ

キズオ　ミテ　ヤロオト　オモっテ　ワタクシガ　カゴノ
トオ　アケマスト　ヤマガラワ　トビダシテ
タケガキノ　ウエニ　トマっテ　ソレカラ　ウラノ
ヤマエ　トンデ　イっテ　シマイマシタ

五十六頁

コレワ　ワタクシガ　ナナツノ　トシノ　コトデシタ
イマデモ　ヤマガラノ　コエオ　キクト　マダ　アレガ

イキテ　イル　ダロオカ　アシノ　キズワ
ドオシタロオカト　オモワナイ　コトワ　アリマセン』

〔甲〕(イ) 發音　特に記すべきこと無し。
(ロ) アクセント　續き下りの例、カっテアリマシタ、ナっテイマシタ、ミテヤロオト、オモワナイコトワ。
續き上りの例、アシノユビオ、ウチノモノワ。
カっテ「飼」。參考、カっテ(平)「買って」。エオ「餌」「繪」。參考エオ(平)、「柄」。
トンデイっテ、又は續けてトンデイっテ、俗語ではトンデっテ。

〔乙〕(イ) 斷續　『ある晩』の次は切らない方がよい。『とび出して』『止って』の次は一々切つた方がよい。一々飛び移り飛び去る様をアレ〳〵と思ひながら見送る心を表す。
(ロ) 速度　全體として稍ゆつくりいふ。
(ハ) 抑揚調子　『どんなにか』を強めると同情と憐れみの心が表れるであらう。『七つの』を強める。『まだ』を強める。

ジュウイチ』　オオエヤマ』

オオエヤマニ　シュテンドオジト　ユウ　オニガ　イテ
トキドキ　ミヤコニ　デテ　キテワ　モノオ　ヌスンダリ
オンナヤ　コドモオ　サラっタリ　シマシタ』　ミヤコワ
オオサワギデス』』
テンシサマワ　タイソオ　ゴシンパイニ　ナっテ
ライコオト　ユウ　エライ　タイショオニ
シュテンドオジオ　タイジル　ヨオニ　オイイツケニ
ナリマシタ』　ソコデ　ライコオワ　ゴニンノ　ツヨイ

ケライオ　ツレ　ヤマブシノ　スガタオ　シテ

デカケマシタ

オオエヤマエ　キテミルト　オニノ　スム　トコロダケ

アっテ　タイボクガ　コンモリト　オイシゲリ　ヒルデモ

ウスグラクテ　ホントオニ　モノスゴイ　ヤマデシタ

シカシ　ミンナ　ツヨイ　ヒトタチデスカラ　ビクトモ

セズ　ケワシイ　ヤマミチオ　ノボっタリ　フカイ

タニオ　ワタっタリ　シテ　ダンダン　オクエ　ススンデ

イキマシタ

シバラク　イクト　オオキナ　イワガ　アっテ

ソノ　ソバニ　ヒトリノ　オジイサンガ　タっテ

イマシタ　ソオシテ　アナタワ　ライコオサマデワ

アリマセンカ　ワタクシワ　キョオ　アナタガ　ココニ

オイデニ　ナルト　キイテ　オマチシテ　イタノデス

コノ　サケワ　オニガ　ノメバ　ヨワク　ナリ

ニンゲンガ　ノメバ　ツヨク　ナル　フシギナ

サケデス　コレオ　モっテイっテ　オニオ　タイジテ

クダサイ>ト　イっテ　ヒトツノ　ツボオ　ワタシマシタ

ライコオワ　ヨロコンデ　ソノ　ツボオ

ウケトリマシタ

六十一頁

モっト ススンデ イキマスト コンドワ タニガワデ
ヒトリノ ワカイ オンナガ シクシクト ナキナガラ
センタクオ シテ イマシタ ライコオガ フシギニ

六十二頁

オモっテ ナゼ ナイテ イマスカ>ト タズネマスト
オンナワ ワタクシワ ミヤコノ モノデスガ オニニ
サラワレテ ココニ キマシタ イツ コロサレルカ
ワカリマセン ソレガ カナシクテ ナイテ
イルノデス>ト イイマシタ ライコオワ ワタクシワ
テンシサマノ オオセオ ウケテ ソノ オニオ
タイジニ キマシタ オニノ イル トコロワ

六十三頁

ドコデスカ アンナイシテ クダサイ>ト イイマスト
オンナワ タイソオ ヨロコンデ マア ナント ユウ
アリガタイ コトデショオ ドオゾ オニオ ウチトっテ
ワタクシタチオ オタスケ クダサイ>ト イっテ
サキニ タっテ ミチアンナイオ シマシタ
ヤガテ ムコオニ オオキナ テツノ モンガ
ミエマシタ ソノ ソバニ オニノ バンペエガ
テツノ ボオオ モっテ タっテ イマシタ ライコオワ
ソコエ イっテ ワタクシタチワ ヤマブシデスガ
ミチニ マヨっテ コマっテ イマス ドオゾ ヒトバン

六十四頁

六十五頁

オトメクダサイ>ト　イイマシタ　オニノ　バンペエワ
イチド　オクエ　ハイリマシタガ　マタ　デテキテ
ライコオタチオ　シュテンドオジノ　イル　リっパナ
ゴテンエ　ツレテ　イキマシタ
シュテンドオジワ　ケライノ　オニドモオ　オオゼエ
アツメテ　サカモリオ　シテ　イマシタ
ライコオタチガ　ハイっテ　クルノオ　ミルト
オオキナ　メオ　ムイテ　ギョロリト　ニラミマシタガ
ヤマブシタチ　トメテ　アゲヨオ　ユっクリ　ヤスムガ
、
ヨイ>ト　イイマシタ　ライコオワ　アリガトオ

六十六頁

六十七頁

ゴザイマス　ワタクシドモワ　マイニチ　ノヤ
ヤマニバカリ　ネテ　イマシタガ　コンヤワ
オカゲデ　ユっクリ　ヤスマレマス
チョオド　オサカモリノ　サイチュウノ　ヨオデスガ
ワタクシモ　ヨイ　サケオ　モっテ　イマス　ヒトツ
メシアガっテ　クダサイ>ト　イっテ　オジイサンカラ
モラっタ　サケオ　トリダシマシタ　シュテンドオジワ
ヒトクチ　ノンデ　ミルト　コレマデ　ノンダ　コトモ
ナイヨオナ　オイシイ　サケデスカラ　コレワ　ンマイ
コレハ　ヨイ　サケダ>ト　イっテ　ガブガブ　ノミマシタ

六十八頁

六十九頁

ホカノ　オニドモモ　ツギツギト　タクサン
ノミマシタ　ソノウチニ　フシギナ　サケノ　キキメガ
アラワレテ　シュテンドオジワ　ダンダン　ゲンキガ
ナクナリ　シマイニワ　グッタリト　ネテ
シマイマシタ　ホカノ　オニドモモ　アスコエ　ニヒキ
ココエ　サンビキト　ゴロゴロ　タオレテ
シマイマシタ
コノ　ヨオスオ　ミタ　ライコオタチワ　モッテキタ
ヨロイヤ　カブトオ　トリダシテ　ミジタクオ
シマシタ　ライコオワ　シュテンドオジオ　ヨビオコシ

七十頁

カタナオ　ヌイテ　エイト　イッセエ　ソノ　クビオ
キリオトシマシタ　トコロガ　クビワ　トビアガッテ
クチカラ　ヒオ　ハキナガラ　ライコオノ　アタマニ
カミツコオト　シマシタ　ケレドモ　ライコオノ
イキオイニ　オソレテ　ソノママ　オチテ
シマイマシタ　コノ　サワギニ　ホカノ　オニドモガ
メオ　サマシテ　ムっカテ　キマシタガ　ライコオタチ
ロクニンニ　ミンナ　コロサレテ　シマイマシタ
ソコデ　ライコオワ　シュテンドオジノ　オオキナ
クビオ　ケライニ　カツガセ　サラワレテキタ

七十一頁

オンナヤ　コドモタチオ　ツレテ　メデタク　ミヤコエ
カエリマシタ

〔甲〕

(イ) **發音**　テンシサマ、シに母音無聲化を起すことが多い。無聲化しない様にいつても良い。ガブガブ、ゴロゴロ、ガゴは二つとも鼻音でないgを發音する。ツギツギ、時にツギズギと二番目の『次』を『濁音』にいふ人もあるが、ツギといふ方が多い様である。エイト（七十一頁一行）は力を入れるかけ聲であるから「エイ」とイを發音する。

(ロ) **アクセント**　續き下りの例、デテキテワ、サラつタリシマス、タつテイマシタ、ヨワクナリ、ツョクナル、アリガタイコトデショオ、タつテイマシタ、コマつテイマス、ハイつテクルノオ、アリガトオゴザイマス、モつテイマス、ノンデミルト、ノンダコトモ。

續き上りの例、タイジルヨオニ、オイデニナル、ナイテイマスカ、オタスケクダサイ、ネテシマイマシタ。

キテミルト、別々にはキテ、ミルトであるが多く續けていふので上記の型になる。一種の續き下りの例である。ヒルデモ參考、ヒル「蛭」。モつテイつテ、常に續けて此の型でいふ、俗語ではモつテっテといふ。別々にはモつテ、イつテである。エイト、アクセント不定、但し多くはエの方を強く、從つて高い調子でいふであらう。サラワレテキタ、多く續けて此の型でいふ。別々にはサラワレテ(平)、キタである。

〔乙〕

(イ) **斷續**　本文表記の外、『生ひしげり』（五十八頁五行）の次は切つてもよい。『今度は、谷川で』、と續けてその次を切るのは良くない。さう續けると「今度出逢つた(到着した)のは谷川であつた」とか「前には別の處で洗濯してゐたが今度は谷川で洗濯してゐた」等の意味に聞える恐がある。『ゆつくり休まれます』（六十六頁末行）の次は休止を置く。話題を變へるからであり、賴光が落附いてゐるからでもある。但し此處の休止を餘り長くしない様注意を要する。餘り長く休止すると、賴光が好機會を捉へた心持にゆるみを生ずる様に聞える。『このさわぎに』（七十頁七行）は原文で行が變つてゐるが、その前に休止を置かない。切迫した光景を表す心である。

(ロ) **速度**　おちいさんの言葉『あなたは頼光様……』はすべてゆつくりいふと良い。女の言葉の中『まあ何といふ……』は稍速くいふ方がよい。大江山へ到着して後の頼光の言葉も特に注意して落ち附いていふべきである。殊に『ありがたうございます』(六十六頁)などは叮嚀な言葉の中にも大將たる落附いた態度を示す樣ゆつくりいふべきである。

(ハ) **抑揚調子**　おちいさんの言葉『あなたは頼光樣……』といふ中『頼光樣』の方を強める。もし『あなたが……』とあればその方を強めるべきである。『ありませんか』の終は極僅か尻上りにいふ。『鬼が』『弱く』『人間が』『強く』を強める。二つ相對照していふからである。女の言葉二回ある中、始めの『私は都の……』は沈んだ調子で悲しさうにいふ。之と對照して次の『まあ何といふ……』は驚きと喜びを表す樣にいふ。頼光の言葉『その鬼を……』の『その』を強める。その前にある女の言葉の中『鬼にさらはれて』は「貴方は御存知ないかも知れないが、或鬼に……」といふ心が含まれる。頼光の方は「それは

既に知つて居る。その鬼が目的なのだ」といふ心を表す。『どこですか』の終は尻下りの調子。女の言葉『何といふ』を強め、『どうぞ』を強める。『これはうまい……』の『これは』を強める。鬼共が酒をのんでぐつたりとねたりごろ〳〵たふれたりする處は聲を稍弱くゆつくりいふ。是と對照して『このやうすを見た……』以下七十一頁二行『殺されてしまひました』迄は聲を強くいふ。速度は必ずしも速くなくてよい。間や休止を短くすることによつて切迫した光景を示すことが出來る。

ジュウニ　オニゴっコ

ジャンケンポンヨ　アイコデ　ショ　オニガ　キマっテ
バラバラト　カケダシ　ニゲダシ　ニゲマワリ
ヒダリエ　ミギエ　ニゲジョオズ

七十三頁

ウっカリ　スルナ　ユダンオ　スルナ　オニワ
テバヤダ　アシバヤダ　スグ　ネラワレテ　ツカマルゾ

七十四頁

ソレソレ　ニゲロ　ソレ　ニゲロ
オニサン　ホントニ　オっカケジョオズ　マイチモンジニ
オイカケテ　キュウニ　ヨコムキ　ウシロムキ
ツカマエジョオズ　オイジョオズ
ツカレタ　モノヤ　ヨワっタ　モノワ　メニ　カケナイゾ
オワナイゾ　ゲンキノ　ヨイ　モノ　ハヤイ　モノ

七十五頁

ヒダリエ　ミギエ　ソレ　ニゲロ

〔甲〕

(イ) **發音**　オっカケとオイカケと二つの形が出てゐる。之を混雜しない様にいふことが必要である。

(ロ) **アクセント**　續き下りの例、ツカレタモノヤ、ヨワっタモノワ、ヨイモノ、ハヤイモノ。

ジャンケンポン、アクセント不定。但し大體平板式の様にいふ。

ソレソレ、又は二つ別々にソレ　ソレといつてもよい。

〔乙〕

(イ) **斷續**　『ばら〳〵と』の次は殆ど間を置かない位にいつて良い。各節の第一行と第二行との間の斷續に變化を附けるのも一つの面白いいひ方であらう。第一節『じゃんけんぽんよ』の次は一寸切る。第二節『うっかりするな』の次も一寸切る。第三節『鬼さんほんとに』の次は切らない。第四節『つかれたものや』の次も切らない。

(ロ) **速度**　全體として多少速くいふ方がよい。勿論餘り速過ぎてはいけないが、九、山がらや、十五、すゞめの様にゆつくりいふのは不適當であらう。

(ハ) **抑揚調子**　七五、八五等のリズムを餘りいつも同様にいふ時は單調になる恐がある。處々で適當に間と休止を置いて單調を破る様に

工夫するのが良いであらう。例へば『かけ出し』『逃出し』『手早だ』『横向』『後向』等の次で一寸切るのは一案である。『うっかりするな……するな』の終、『つかまるぞ』『追はないぞ』の終を少し尻上りの調子にいつても良いであらう。但し必ずしも尻上りと限つたことはない。

ジュウサン　ユウビン

七十六頁

イママデ　ハネオツイテ　イタ　ハナコサント
ユキコサンワ　コンドワ　ユウビンゴっコオ　スル
コトニ　シマシタ
ハナコサンワ　オトオトノ　サンチャンオ　ヨンデ
キマシタ　サンチャンワ　ヨロコンデ　アカイ　カミオ
チイサク　キっテ　キっテオ　コシラエマシタ

七十七頁

ユキコサンワ　ハガキト　フウトオオ　コシラエマシタ
ハナコサンワ　オカアサンカラ　オオキナ　カミノ
ハコオ　イタダイテキテ　ポストオ　コシラエマシタ
ソレカラ　ハナコサント　ユキコサンワ　エンガワデ
リョオホオニ　ワカレテ　スワリマシタ　サンチャンワ
マンナカニ　ポストオ　オイテ　ソノ　ソバニ
スワリマシタ
ハナコサント　ユキコサンワ　ダマっテ　ナニカ
カキハジメマシタ　ソノ　アイダニ　サンチャンワ
カバンオ　トリニ　イキマシタ

七十八頁

サンチャンガ　モトノ　トコロエ　カエっテ　キマスト

ポストノ　ナカニワ　モオ　ニマイノ　ハガキガ

ハイっテ　イマシタ　サンチャンワ　ソレオ　カバンニ

イレテ　ハイタツニ　デマシタ　ユウビン　イチマイオ

七十九頁

ハナコサンニ　ワタシマシタ　ユウビン　イチマイオ

ユキコサンニ　ワタシマシタ

ハナコサンワ　ニコニコシテ　ヨミマシタ　シンネン

オメデトオ　ゴザイマス　ユキコサンモ　ウケトっタ

ハガキオ　ヨンデ　ミマスト　ヤっパリ　シンネン

オメデトオ　ゴザイマス>ト　カイテ　アリマシタ　アラ

八十頁

オンナジデスネ>ト　イっテ　フタリトモ

ワライマシタ

サンチャンガ　オオキナ　コエデ　モオ　アリマセンカ

アっタラ　ハヤク　ダシテ　クダサイ>ト　イイマシタ

ハナコサンワ　コンドワ　ワタクシガ　サキニ

八十一頁

カキマスカラ　ユキコサン　ゴヘンジオ　クダサイ>ト

イっテ　テガミオ　カキマシタ　ソオシテ　サンチャンノ

トコロエ　モっテイっテ　サンセンノ　キっテオ

イチマイ　クダサイ>ト　イイマシタ　サンチャンガ

キっテオ　ワタシマスト　ハナコサンワ　ソレオ　ハっテ

八十二頁

ポストエ　イレマシタ‖

サンチャンワ　ソノ　テガミオ　ユキコサンノ　トコロエ

モっテイっテ　ユウビン>ト　イっテ　ワタシマシタ‖

ユキコサンガ　アケテ　ミマスト　アシタカラ

ガっコオガ　ハジマリマスガ　マタ　イっショニ

八十三頁

イキマショオ　アサ　サソっテ　クダサイ>ト　カイテ

アリマシタ‖　ユキコサンワ　オテガミ　アリガトオ

ゴザイマス‖　キっト　オサソイ　シマスカラ

サンチャント　イっショニ　マっテ　イテ　クダサイ>ト

カイテ　キっテオ　ハっテ　ポストエ　イレマシタ‖

〔甲〕

(イ) 發音　特にいふべきこと無し。

(ロ) アクセント　續き下りの例、コトニシマシタ、トリニイキマシタ、カエっテキマスト、ハイっテイマシタ、ヨンデミマスト、カイテアリマシタ、ダシテクダサイ。

續き上りの例、ハネオツイテ、ヨンデキマシタ、オメデトオゴザイマス、アケテミマスト、サソっテクダサイ、オサソイシマスカラ。

ハネオツイテ、多くは續けて此の型でいふ。語原的にいへばツイテ(突)は平板式の型であるが、「羽根をつく」時は決して平板式にいはない。

比較、ハネオツク、ハネオツカナイ、ハネオツイタ。參考、ツイタ「附」。スルコトニ、續けてはスルコトニ又はスルコトニといふ。カミノ、ノが附く時平板式にいふ。比較、カミ、カミデ、カミガ等。參考、カミ「上」「神」。

モトノ、本書三十七頁原讀本二十七頁二行三行參照。ヨンデ「讀」。參考、ヨンデ(平)「呼」。ハっテ「貼」。參考、ハっテ「這」、ハル(平)「貼」「張」、ハル「春」、ハウ「這」。マっテ「待」。參考、マっテ(平)「舞」、マッ「待」「松」、マウ(平)「舞」。

〔乙〕

(イ) 斷續　本文表記の外、七十六頁五行『花子さんは』の次斷續隨意。七

十七頁七行『その間に』の次で切り『三ちゃんは』の次を切らないでもよし、又は『その間に三ちゃんは』と續けてその次で切つてもよし、いづれでも大したちがひは無い。八十頁七行『書きますから』の次は斷續隨意。

(ロ) **速度**　三ちやんの言葉『いうびん』と呼ぶ聲は稍速くいつてよい。手紙を讀む所はいづれも稍ゆつくりいふ方がよい。

(ハ) **抑揚調子**　強めるべき語句『いうびんごつこ』(七十五頁)『切手を』『はがきとふうとう』『紙の箱』『ポスト』。七十七頁末行の『かばんを取りに』。

七十九頁五行『やつぱり』を強める。

『おんなじですね』の終は尻上りの調子。

『もうありませんか……』は『大きな聲』とことわつてあるから、その通り大きな聲でいふべきである。『ありませんか』の終は尻上り。『出して下さい』の終は尻上りでも下りでもどちらでもよい。

『私が』(八十頁七行)を強める、『切手を一枚下さい』の終は尻下りがよい。

八十四頁

ジュウシ　ニイサンノ　ニュウエエ

キョオワ　ニイサンガ　ニュウエエスル　ヒデス

ニイサンワ　セエネン　クンレンジョノ　フクニ

キカエマシタ　ソバデ　オカアサンガ　ナニカ

八十五頁

ワスレタ　モノワ　ナイカト　イロイロ　セワオ　シテ

イラッシャイマス　ソコエ　オトオサンガ　ハイッテ

キテ　シタクワ　デキタカ>ト　オッシャルト　ハイ

スッカリ　デキマシタ>ト　ニイサンガ　コタエマシタ

オザシキノ　ホオデワ　シンルイヤ　キンジョノ　ヒトガ

八十六頁

アツマっテ　ニギヤカニ　ハナシオ　シテ　イマス‖
ハチジガ　ナっタノデ　ミンナ　ソロっテ　デカケマシタ‖
ウジガミサマエ　オマイリオ　シテ　ソレカラ
テエシャジョオエ　イキマシタ‖
テエシャジョオデワ　ソンチョオサン　コオチョオサン
ザイゴオグンジン　セエネン　クンレンジョノ
ヒトタチガ　オオゼエ　アツマっテ　イマシタ‖

八十七頁

ニイサンオ　ミルト　オメデトオ　オメデトオ>ト
イイマシタ‖　ニイサンワ　ニコニコシテ　ミンナニ
オジギオ　シマシタ‖

八十八頁

マモナク　キシャガ　キマシタ‖　ニイサンワ　ゲンキナ
コエデ　デワ　イっテマイリマス>ト　アイサツオ　シテ
キシャニ　ノリマシタ‖　ワタクシガ　オオキナ　コエデ
ニイサン　ゴキゲンヨオ>ト　ユウト　オトオサンモ

八十九頁

ツズイテ　シっカリ　ヤっテ　コイヨ>ト
オっシャイマシタ‖
キシャワ　シズカニ　ウゴキダシマシタ‖　バンザイ‖
バンザイ‖　ミンナワ　ムチュウニ　ナっテ　サケビマシタ‖
ニイサンワ　キシャノ　マドカラ　カオオ　ダシテ
ナンベンモ　ボオシオ　フリマシタ‖

〔甲〕

(イ) **發音**　セイネンクンレンジョ「青」の字はこゝで「セイ」といつても良いであらう。平生餘り屢使はない漢語は字音假名遣通り「セイ」等と「イ」の音を入れていふことがある。もし此の語「青年」を平生屢使ふとすれば「セエ」といふのが自然である。「在鄕軍人」は續けていふけれども「軍人」が獨立の單語であるため「グ」を鼻音にいはない。

(ロ) **アクセント**　續き下りの例、ハイっテキテ、アツマっテイマシタ。續き上りの例、ヤっテコイヨ。

ヒデス「日」を獨立にいふ時は平板式である。從つてヒガ、ヒニ、ヒデスなどといふ。此の例の如く上から續く時「……ヒデス」といふ。ワスレタモノワ、續けてワスレタモノワともいふ。マモナク又はマモナク。バンザイ、本書卷一、二十五頁（原讀本卷一、七頁ヒノマルノハタ、バンザイ）參照。フリマシタ「振」「降」共に同じ。參考、フル（平）「振」、フル「降」。

〔乙〕

(イ) **斷續**　本文表記の外、『集ッテ』（八十五頁七行）の次斷續隨意。

(ロ) **速度**　此の課に出る人々の言葉は皆元氣のよい言葉ばかりであるから、餘りゆつくり過ぎない速度で元氣よくいふのが良い。

九十頁

(ハ) **抑揚調子**　父の言葉『シタクハ出來タカ』『シッカリヤッテ來イヨ』の終は共に尻上りの調子。その他すべて元氣よく勇ましい語氣でいふのが良い。

九十一頁

ジュウゴ　スズメ

キノ　エダニ　スズメガ　サンバ　ユキガ　チラチラ

フっテイル　ピっタリト　カラダオ　ツケアっテ

ナランダ　スズメ　サンバノ　スズメ　オマエノ

ウチワ　ドコニ　アル　ハヤク　オカエリ　ヒガ

クレル

〔甲〕

(イ) **發音**　特に記すべきこと無し。

(ロ) **アクセント**　フっテイル、フの母音無聲化しない時はフっテ、フル、で

ある。通常無聲化することが多い。ヒガ、平板式、前課八十二頁（原讀本八十四頁「日デス」）參照。

〔乙〕

(イ) 斷續　此の課の樣な韻文は斷續に注意して多少の變化を附けないと單調に陷り易い。本文表記はその一例である。

(ロ) 遠度　全體としてゆつくりした速さが適當である。

(ハ) 抑揚調子　『雪がちら〳〵降つてゐる』は稍弱くいふのも良い。『どこにある』は尻下りの調子が良い。『早くおかへり』の終は尻上りにしてもよい。さうすると語氣が柔かく聞える。又は『どこにある』の終を尻上りにし、『おかへり』の終を尻下りにするのも一つの仕方であらう。

九十二頁

ジュウロク|シロウサギ||

シマ|ニ　イタ　シロウ|サギガ　ムコオノ　リクエ　イっテ

ミタイト　オモイ|マシタ||

九十三頁

アル|ヒ　ハマ|ベエ　デ|テ　ミ|ルト|　ワニ|ザメガ

イマ|シタノデ|　キミノ　ナカ|マト　ボ|クノ　ナカ|マト

ド|っチガ　オオ|イカ　クラベテ　ミヨ|オ>ト　イイ|マシタ||

ワニ|ザメワ|　ソレワ　オモ|シロカロオ>ト　イっテ|

ス|グニ　ナカ|マオ　オオゼエ　ツレテ　キマ|シタ||

シロウ|サギワ　ソレオ　ミ|テ|　ナルホド　キミノ

ナカ|マワ　ズイブン　オオ|イナ||　コレ|デワ　ボ|クラノ

ホ|オガ　マケ|ルカモ　シレナイ||　キミ|ラノ　セナカノ

ウエ|オ　アル|イテ　カゾ|エテ　ミ|ルカラ|　ムコオノ

リク|マデ　ナランデ　ミタ|マエ>ト　イイ|マシタ||

九十四頁

九十五頁

ワニザメワ　シロウサギノ　ユウ　トオリニ
ナラビマシタ　シロウサギワ　ヒトツ　フタツ　ミっツ
ヨっツト　カゾエテ　ワタっテ　イキマシタガ　モオ
ヒトアシデ　リクエ　アガロオト　ユウ　トコロデ
キミラワ　ンマク　ダマサレタナ　ボクワ　ココエ

九十六頁

ワタっテ　キタカっタノダ　アハハハ>ト　イっテ
ワライマシタ　ワニザメワ　ソレオ　キクト　タイソオ
オコリマシタ　イチバン　シマイニ　イタ　ワニザメガ
シロウサギオ　ツカマエテ　カラダノ　ケオ　ミンナ
ムシリトっテ　シマイマシタ

九十七頁

シロウサギワ　イタクテ　タマリマセンカラ　ハマベニ
タっテ　ナイテ　イマシタ　ソノトキ　オオゼエノ
カミサマガ　オトオリニ　ナっテ　オマエ　ナゼ　ナイテ
イルノカ>ト　オタズネニ　ナリマシタ　シロウサギガ
イママデノ　コトオ　モオシマスト　カミサマワ
ソレナラ　ウミノ　ミズオ　アビテ　ネテ　イルガ

九十八頁

ヨイ>ト　オっシャイマシタ　シロウサギワ　スグ
ウミノ　ミズオ　アビマシタ　スルト　イタミガ
イっソオ　ヒドク　ナっテ　ドオニモ　タマラナク
ナリマシタ

ソコエ　オオクニヌシノ　ミコトト　ユウ　カミサマガ
オイデニ　ナリマシタ　コノ　カタワ　サキホド
オトオリニ　ナっタ　カミサマガタノ　オトオトサンデス
アニサマガタノ　オモイ　フクロオ　カツイデ
イラっシャっタノデ　オソク　オナリニ　ナっタノデス
コノ　オオクニヌシノ　ミコトモ　オマエ　ナゼ
ナイテ　イルノカ　オタズネニ　ナリマシタ
シロウサギワ　ナキナガラ　マタ　イママデノ　コトオ
モオシマシタ　オオクニヌシノ　ミコトワ
カワイソオニ　ハヤク　カワノ　ミズデ　カラダオ

九十九頁

百頁

アラっテ　ガマノ　ホオ　シイテ　ソノ　ウエニ
コロガルガ　ヨイ　オっシャイマシタ
シロウサギガ　ソノ　トオリニ　シマスト　カラダワ
スグ　モトノ　ヨオニ　ナリマシタ　ヨロコンデ
オオクニヌシノ　ミコトニ　オカゲサマデ　スっカリ
ナオリマシタ　アナタワ　オナサケブカイ
オカタデスカラ　ノチニワ　キっト　エライ　オカタニ
オナリデショオ　モオシマシタ
シロウサギノ　イっタ　トオリ　オオクニヌシノ
ミコトワ　ソノノチ　エライ　オカタニ　オナリニ

百一頁

ナリマシタ

〔甲〕

(イ) **發音**　ヨっツット(九十五頁一行)、こゝは力を入れて一々數へることを表すためッに母音無聲化を起さない樣にいふと良い。ンマク、ンはm の子音だけで一音節をなす。アハハ、强く笑ふ時「ハ」の字で表す音は喉頭内の聲門摩擦音を發する。

(ロ) **アクセント**　續き下りの例、デテミルト、カゾエテミルカラ、ヒドクナつテ、モトノヨオニ。

續き上りの例、イつテミタイト、クラベテミヨオト、ツレテキマシタ、ナランデミタマエト、ユウトオリニ、モオヒトアシデ、オトオリニナっテ(其の他オタズネニナリマシタ、等……ニナっテと續くもの皆同じ。)

ネテイルガ、イっタトオリ。

デテミルト、この「ミル」は眼で觀るといふ文字通りの意味でなく「試みに」の意味を含んでゐる。この時ミルトは常に上に續けていふ。一つ離してはミルトである。次の九十三頁五行ソレオ　ミテ參照。

キミラノ、又はキミラノともいふ。アハハ、アクセント不定。イっソオ「一層」は平板式。參考、イっソオ「一艘」。コノカタワ、又は續けてコノカタワ。ガマ、アクセント不確、人によってはガマといふ。參考ガマ(平)「蝦蟇」。ホオ「穂を」。參考、ホオ(平)「帆を」。

〔乙〕

(イ) **斷續**　本文表記の外、『なるほど』(九十三頁六行)の次は斷續隨意。『白兎をつかまへて』(九十六頁四行)の次は切らない方がよい。

(ロ) **速度**　特に著しく速度の變化を附けるべき處は無い。

(ハ) **抑揚調子**　强める語句、『ずゐぶん』(九十三頁六行)、『負けるかも』、『もう一足で』(九十五頁三行)、『渡って來たかった』、『すぐ』(九十七頁末行)『一そう』(九十八頁一行)、『すっかり』(百頁七行)。

調子、『多いな』(九十三頁—六七行)の終は一ぺん上って直ぐ下る調子。

『たまされたな』(九十五頁六—七行)の終は尻上り。

あはゝゝは笑ひ聲に近くいふ方がよい。『なぜ泣いてゐるのか』(九十七頁二行、九十九頁二行共に)尻下りの調子。もし尻上りにいふと語氣が柔かくなり過ぎて此の場合不適當であらう。

ジュウシチ マメマキ

百二頁

キョオワ セツブンデ マメマキノ ヒデス

コトシカラ オマエ マケト オトオサンガ

オっシャっタノデ ボクワ ウレシクテ タマリマセン

オカアサンワ マメオ タクサン イっテ マスニ イレ

カミダナニ オソナエニ ナリマシタ ボクワ ハヤク

バンニ ナレバ ヨイト オモイマシタ

百三頁

ダンダン ウスグラク ナルト アチラデモ

コチラデモ マメマキノ コエガ キコエマス

オトオサンガ ヨシオ ウチデモ ソロソロ

ハジメルカネ>ト オっシャっテ カミダナカラ マスオ

百四頁

オロシテ クダサイマシタ

ボクワ スコシ ハズカシカっタガ オモイキっテ フクワ

ウチ オニワ ソト>ト コエオ ハリアゲテ マメオ

マキマシタ ホオボオノ ヘヤオ マイテ アルクト

イモオトヤ オトオトガ アトカラ ツイテキテ

百五頁

キャっキャっト オオサワギオ シテ マメオ

ヒロイマシタ ボクモ オモシロク ナっテ ダンダン

オオキナ コエオ ダシナガラ マメオ マキマシタ

百六頁

ソノウチニ　ウっカリシテ　オニワ　ウチ　フクワ
ソト>ト　イっタノデ　ミンナガ　ドっト
ワライマシタ‖

シマイニ　エンガワニ　デテ　オニワ　ソト　オニワ
ソト>ト　イイナガラ　マメオ　ニワニ　ムカっテ
イセエヨク　マキマスト　オカアサンガ　アマドオ
ピシャリト　オシメニ　ナリマシタ‖

百七頁

ソレカラ　ミンナデ　マメオ　トシノ　カズダケ
タベマシタ‖　オカアサンワ　コレデ　ホントオニ
ヒトツ　トシオ　トっタノデスヨ‖　コレカラ　モっト

ベンキョオシナケレバ　イケマセン>ト　オっシャイマシタ‖

〔甲〕

(イ) **發音**　イセエヨク、語原からいへば威勢といふ漢語であるが、日常の俗語化してしまつてゐるのでイセエといふ。

(ロ) **アクセント**　續き下りの例、オモシロクナっテ。
續き上りの例、オソナエニナリマシタ、バンニナレバ。
ヒデス、前出八十二頁（原讀本、八十四頁二行）參照。マケ、參考マケ「卷ケ」「負」。イっテ、參考イっテ(平)「言」。イル「煎」「射」、イル(平)「居」。マス「桝」。參考、マス(平)「增」「鱒」。フクワウチ、舊來の豆まきの慣習で唱へる聲はフクワウチ、オニワソトの型に似た調子を附け「フクワー」「オニワー」と長くいふ。こゝは假に單語のアクセントの型だけ表記した。キャっキャっト、アクセント不定。

〔乙〕

(イ) **斷續**　本文表記の外特に記すべきこと無し。

(ロ) **速度**　誤つて「鬼は內」といつた言葉は稍速くいつて良い。だん〳〵馴れて面白くなつたためうつかり誤つて、馴れて早口にいつたので

あらう。

(ハ) 抑揚調子　『そろ〳〵始めるかね』の終は尻上りの調子。『年を取ったのですよ』(百七頁一二行)の終も尻上りの調子。

百八頁

ジュウハチ　ユリワカ

ムカシ　ユリワカト　ユウ　ユミノ　ジョオズナ

タイショオガ　アリマシタ

アルトシ　ガイコクノ　グンゼエガ　タクサンノ

フネニ　ノっテ　セメヨセテ　キマシタ　テンシサマワ

ユリワカオ　オメシニ　ナっテ　ハヤク　イっテ　テキオ

オイハラエ>ト　オっシャイマシタ

ユリワカワ　オオキナ　テツノ　ユミト　テツノ　ヤオ

百九頁

モチ　オオゼエノ　ケライオ　ツレテ　デカケマシタ

ソオシテ　サカンニ　テツノ　ヤオ　イカケマシタノデ

テキノ　フネワ　ツギツギニ　シズメラレ　ノコっタ

フネワ　チリジリニ　ナっテ　ニゲダシマシタ　ソコデ

ユリワカノ　グンゼエワ　フネオ　ダシテ　オイカケ

オイカケ　トオトオ　テキノ　フネオ　スっカリ

百十頁

オイハラっテ　シマイマシタ

コオシテ　カチニ　カっタ　ユリワカノ　グンゼエワ

モトノ　ハマベエ　ヒキカエス　コトニ　ナリマシタ

トコロガ　カエル　トチュウニ　キレエナ　シマガ

百十一頁

アリマシタノデ　ユリワカワ　ケライノ　クモタロオ
アメタロオト　ユウ　キョオダイノ　モノオ　ツレテ
ソノ　シマエ　アガっテ　ミマシタ　ソコニワ
ウツクシイ　クサガ　イチメンニ　ハエ　カワイラシイ
トリガ　オモシロク　ウタっテ　イマシタ　アア　ヨイ
トコロダ　シバラク　ココデ　ヤスム　コトニ
シヨオ>ト　イっテ　ユリワカワ　ゴロリト　クサノ
ウエニ　ネコロビマシタ
ナガイ　アイダノ　ツカレガ　デタト　ミエテ
ユリワカワ　イツノマニカ　グっスリ　ネコンデ

百十二頁

シマイマシタ　ソオシテ　ミっカミバン　タっテモ　マダ
メガ　サメマセンデシタ
コノ　ヨオスオ　ミテ　クモタロオキョオダイワ　フト
ワルイ　ココロオ　オコシ　ユリワカオ　シマニ
オキザリニ　シテ　ジブンタチガ　タイショオニ
ナロオト　カンガエマシタ　フタリワ　フネエ　カエっテ
タイショオワ　ヤノ　キズガ　モトデ　トオトオ　コノ
シマデ　オナクナリニ　ナっタ>ト　イイフラシマシタ
クモタロオキョオダイワ　ユリワカノ　グンゼエオ
ヒキイテ　カエリマシタ　ソオシテ　テンシサマニ

百十三頁

百十四頁

ユリワカワ　ウチジニオ　イタシマシタカラ
ワタクシタチ　キョオダイノ　チカラデ　テキオ
スっカリ　オイハラっテ　マイリマシタ>ト
モオシアゲマシタ　キョオダイワ　オモイドオリ
タイショオト　ナリ　コレマデ　ユリワカノ　イタ
リっパナ　シロニ　スンデ　イバっテ　イマシタ
ソノ　ノチ　ナンネンカ　タっテカラノ　コトデス
ナンセンシテ　オニガシマエ　ナガレツイタ　リョオシガ
オニオ　イっピキ　ツレテ　カエっテ　キタト　ユウ
ウワサガ　ツタワリマシタ　コレオ　キイタ

百十五頁

百十六頁

クモタロオキョオダイワ　ソレワ　メズラシイ　モノダ
スグ　ツレテ　コイ>ト　ケライニ　イイツケマシタ
ツレラレテ　キタノオ　ミルト　カミモ　ヒゲモ
ボオボオト　ノビ　カオモ　テアシモ　アカニ
ウズマっテ　マルデ　コケガ　ハエタ　ヨオナ
オトコデシタ　ナルホド　オニノ　ヨオデモ　アリ
ヒトノ　ヨオデモ　アル　ミヤコエ　ツレテ　イっタラ
ヒトガ　メズラシガっテ　ミルダロオ>ト　イっテ
クモタロオキョオダイワ　ソノ　オトコニ　コケマルト
ユウ　ナオ　ツケ　シバラク　イエニ　オク　コトニ

百十七頁

シマシタ

ソノウチニ トシガ カワッテ オショオガツニ

ナリマシタ クモタロオ アメタロオワ ケライオ

アツメテ ユミノ カイオ ヒラキマシタ

クモタロオガ ユミオ イヨオト スル トキ

アハハハ ナンダ アンナ ユミシカ ヒケナイノカ>ト

オオキナ コエデ ワラウ モノガ アリマシタ

ミルト ソレワ コケマルデシタ クモタロオワ

オコッテ イイマシタ ナンダ コケマル モオ イチド

イッテ ミロ コケマルワ ヘエキナ カオデ ソンナ

百十八頁

百十九頁

ユミワ アカンボオデモ ヒケマショオ ハハハ>ト

マタ ワライマシタ ナニオ ナマイキナ ソレナラ

コレオ ヒイテ ミロ>ト イッテ クモタロオワ

イチバン ツヨイ ユミオ ワタシマシタ

コケマルワ スグ ソレオ オッテ シマイマシタ

クモタロオワ クヤシガッテ ムカシ ユリワカガ

ツカッタ テツノ ユミヤオ モチダサセマシタ

ソオシテ コレオ ヒイテ ミロ ユリワカサマノ

ユミヤダ ヒケナカッタラ イノチガ ナイゾ>ト

イイマシタ

百二十頁

コケマルワ　ニっコリ　ワラっテ　ソノ　ユミオ
トリアゲ　テツノ　ヤヤオ　ツガエテ　マンゲツノ
ヨオニ　ヒキシボリマシタ　キュウニ　ヤサキオ
キョオダイノ　ホオエ　ムケテ　ミワスレタカ　ワレコソ
ソノ　ユリワカダ　カクゴシロ〉ト　イイマシタ
フタリワ　オドロイテ　ニゲダシマシタガ　スグニ
イコロサレテ　シマイマシタ

〔甲〕(イ) 發音　アカンボオ(百十八頁六行)、通例アカンボといふ。
(ロ) アクセント　續き下りの例、オイハラっテシマイマシタ、ヒキカエスコトニ、ヤスムコトニ、デタトミエテ、ネコンデシマイマシタ、イバっテイマシタ、カエっテキタト、ハエタヨオナ、オっテシマイマシタ、マンゲ

百二十一頁

ツノヨオニ。
續き上りの例、オメシニナっテ、ツレテコイ、オニノヨオデモ、ヒトノヨオデモ、イっテミロ、ヒイテミロ。
ユリワカ、アクセント不確、今は平板式とする。アア(百十一頁四行)ア、クセント不定。イツノマニカ、本書一七頁(原讀本卷四、四頁)參照。ツレラレテキタ、又は續けてツレラレテキタ。ツレテイっタラ、又は續けてツレテイっタラ。オクコトニ、又は續けてオクコトニ。スルトキ又は續けてスルトキ。ヤサキ又はヤサキといふ人もある。

〔乙〕(イ) 斷續　本文表記の外特に記すべきこと無し。
(ロ) 速度　百十七頁七行『あはゝゝ、何だ……』はやゝゆっくりいふと良い。その他こけ丸の言葉は落ち附いてゆっくりいふ。終の『見忘れたか……』も速くいふ必要はない。之に對し雲太郎の言葉『何だこけ丸もう一度……』『何を生いきな……』『これを引いてみろ……』はせき込んでやゝ速くいふ。
(ハ) 抑揚調子　强める語句、『すっかり』百九頁六行、『休むことに』(百十一頁五

行、『まだ』(百十二頁三行)、『おなくなりになった』(百十三頁三行)、『鬼を』(百十五頁二行)、『それは』(百十五頁六行)、『こけが』(百十六頁三—四行)、『弓の會を』(百十七頁五行)、『あんな』(百十七頁七行)、『赤んばうでも』(百十八頁六行)、『これを』(百十九頁一行)、『一番强い』(百十九頁三行)、『これを』(百二十頁一行)、『命がない』(百二十頁二行)、『滿月のやうに』、『われこそ』(百二十頁末行)、調子『引けないのか』(百十七頁—七八行)の終は尻下り。『何だ』(百十八頁四行)の終も尻下り。『命がないぞ』(百二十頁二行)の終は尻下り、又は尻上りにいつてもよい。『見忘れたか』(百二十頁末行)の終は尻下り。

百二十二頁

『ジュウク　ヒナマツリ』

マっカナ　モオセン　ヒノ　モオセン　キンノ

百二十三頁

ビョオブニ　ダイリサマ　ゴニンバヤシヤ　カンジョタチ

カワイイ　ボンボリ　モモノ　ハナ　アラレ　ヒシモチ

オシロザケ　ソナエテ　キョオノ　ヒナマツリ

トモダチ　ヨンデ　ニギヤカニ　オハナシ　シタリ

百二十四頁

ウタっタリ　オヒナサマモ　ウレシソオ

〔甲〕(イ)發音　ウレシソオ、シに母音無聲化を起すことが多いが、こゝは無聲化しない方がはつきりして良い。

(ロ)アクセント　ヒノ「緋」「日」。參考、ヒノ「火」。

〔乙〕(イ)斷續　第三節一行の終『にぎやかに』の次を切らないか、又は切つても極めて短く切ることにより、他の各行の終又は語句間の間や休止に變化を附けることが出來るであらう。

(ロ)速度　全體として餘り遲過ぎない方が良い。「嬉しさう」な心を表すためである。

(ハ)抑揚調子　全體を樂しい心持で讀む樣に注意する外、特に强弱や調子を變化させるべき程の語句が使つてない。

百二十五頁

ニジュウ　キタカゼト　ミナミカゼ

キタカゼト　ミナミカゼワ　タイソオ　ナカガ　ワルイ

ヨオデス

フユノ　アイダワ　サムイ　キタカゼガ　ビュウビュウト

フキマワリマス　ソオシテ　ユキヤ　アラレオ

フラセタリ　ミズオ　コオラセタリ　シマス

シカシ　キタカゼガ　スコシ　ユダンオ　シテ　イルト

アタタカイ　ミナミカゼガ　ソっト　ヤっテ　キマス

ソオシテ　キタカゼノ　ツクっタ　ユキノ　ヤマヤ

百二十六頁

コオリノ　イケオ　スコシデモ　トカソオト　シマス

スルト　キタカゼワ　スグ　ミナミカゼオ

オイハライマス

コンナ　コトオ　ナンベンモ　クリカエシテ　イル

ウチニ　フユガ　オワリニ　チカズイテ　キマス

ソオシテ　イママデワ　ハンブン　ネムっテデモ　イル

ヨオニ　ヨワイ　ヒカリオ　ダシテ　イタ　オヒサマガ

ダンダン　アタタカイ　ヒカリオ　オクル　ヨオニ

ナリマス

百二十七頁

コオ　ナっテ　クルト　ミナミカゼワ　モオ　マエノ

ヨオニ　マケテバカリワ　イマセン　キタカゼ
オマエワ　モオ　キタノ　クニエ　カエっテ　シマエ>ト
ミナミカゼガ　イイマス　スルト　キタカゼワ　ナアニ
マダ　オマエノ　デテテ　クル　トキデワ　ナイ
ワタシワ　モオ　イチド　オマエオ　オイハラっテ　ノヤ
ヤマオ　マっシロニ　シテ　ヤル>ト　コタエマス
ソオシテ　アリっタケノ　チカラオ　ダシテ
ミナミカゼオ　オイタテマス　ノヤ　ヤマガ　マタ
ユキデ　マっシロニ　ナリマス
シカシ　ミナミカゼワ　スグニ　ゲンキオ

百二十八頁

百二十九頁

モリカエシマス　ソオシテ　ミナミノ　クニカラ
オオゼエノ　ナカマオ　ツレテキテ　キタカゼオ
ドシドシト　オイマクリマス　ユキデモ　シモデモ
コオリデモ　カタハシカラ　トカシテ　ノヤ　ヤマオ
アタタカク　シマス　アタタカイ　アメオ　ナンベンカ
フラセマス　スルト　クサヤ　キガ　ダンダント　メオ
フキ　ハナノ　ツボミガ　フクランデ　キマス
ミナミカゼワ　イイマス　キタカゼガ　シモヤ　ユキデ
ノヤマオ　マっシロニ　シタ　カワリニ　ワタシワ
アカイ　ハナヤ　ミドリノ　ワカクサデ　ノヤマオ

百三十頁

カザっテ　ミセヨオ』

〔甲〕

(イ) 發音　特に記すべきこと無し。

(ロ) アクセント　續き下りの例、ワルイヨオデス、チカズイテキマス、ナっテクルト、マエノヨオニ、デテテクル。

續き上りの例、ヤっテキマス、イルヨオニ、オクルヨオニ、コオナっテ、フクランデキマス、カザっテミセヨオ。

ミナミカゼ、又ミナミカゼといふ人もある。コンナコトオ、又は續けてコンナコトオ。キタノ、ノが附くので平板にいふ。その他はキタ、キタニ、キタガ等といふ。ナアニ、アクセント不定。ナアニの型の様か、又はナアニの型の様にいふことが多い。

〔乙〕

(イ) 斷續　本文表記の外、『今マデハ』(百二十六頁五行)の終は切らない方がよい。『南風ハ』(百二十七頁一行)の終、『出シテ』(百二十八頁三—四行)の終、『北風ガ』(百三十頁三行)の終、はいづれも切らない方がよい。その他本文表記に切る符號の無い處、原文に讀點(、)のある處は斷續隨意である。

(ロ) 速度　全體として稍ゆっくりした速度が適當である。

(ハ) 抑揚調子　強めるべき語句、『少し』(百二十五頁二行)、『カへっテシマへ』(百二十七頁三—四行)、『オ前ノ』(百二十七頁六行)、『マタ』(百二十八頁五行)、調子、言葉の終はすべて尻下りである。

百三十一頁

ニジュウ　イチ』　ハゴロモ』

シロイ　ハマベノ　マツバラニ　ナミガ　ヨセタリ

カエシタリ』』　カモメ　スイスイ　トンデ　イク」

百三十二頁

ソラニ　カスンダ　フジノ　ヤマ』』

ヒトリノ　リョオシガ　ミオノ　マツバラエ　デテ

キマシタ』』(リョオシの語省略、以下同じ)

アア　ヨイ　オテンキダ』　ソオシテ　マア　ナント

百三十三頁

ユウ　ヨイ　ケシキダロオ‖

ケシキニ　ミトレナガラ　アルイテ　イマスト

ドコカラカ　ヨイ　ニオイガ　シテ　キマシタ‖　フト

ミルト　ムコオノ　マツノ　エダニ　ナニカ　キレエナ

モノガ　カカっテ　イマス‖

オヤ　アレワ　ナンダロオナ‖

リョオシワ　ソバエ　ヨっテ　ヨク　ミマシタ‖　キモノダ‖

コンナ　キレエナ　キモノワ　マダ　ミタ　コトガ

ナイ‖　モっテカエっテ　ウチノ　タカラモノニ　ショオ‖

リョオシワ　ソノ　キモノオ　トっテ　モっテイコオト

百三十四頁

百三十五頁

シマシタ‖　スルト　ソノ　マツノキノ　ウシロカラ

ヒトリノ　オンナガ　デテ　キマシタ‖　オンナ（以下人名省く）

モシ　ソレワ　ワタクシノ　キモノデ　ゴザイマス‖

ドオシテ　オモチニ　ナルノデ　ゴザイマスカ‖

イヤ　コレワ　ワタシガ　ヒロっタノデス‖

モっテカエっテ　ウチノ　タカラモノニ　ショオト

オモイマス‖　ソレワ　テンニンノ　ハゴロモデ

アナタガタニワ　ゴヨオノ　ナイ　モノデ　ゴザイマス‖

ドオゾ　オカエシ　クダサイマセ‖　テンニンノ

ハゴロモナラ　ナオサラ　オカエシワ　デキマセン‖

百三十六頁

ニっポンノ　タカラモノニ　シマス　ソレガ　ナイト
ワタクシワ　テンエ　カエル　コトガ　デキマセン
ドオゾ　オカエシ　クダサイマセ　イヤ　イケマセン
カエサレマセン　リョオシワ　ドオシテモ
カエシマセン　テンニンワ　カナシソオナ　カオオ
シテ　ジっト　ソラオ　ミアゲマシタ
テンニンノ　シオレタ　ヨオスオ　ミテ　リョオシモ
キノドクニ　オモイマシタ　アンマリ
オキノドクデスカラ　ハゴロモオ　オカエシ
イタシマショオ　ソレワ　アリガトオ　ゴザイマス

百三十七頁

百三十八頁

デワ　コチラエ　イタダキマショオ　オマチクダサイ
ソノ　カワリニ　テンニンノ　マイオ　マっテ　ミセテ
クダサイマセンカ　オカゲデ　テンエ　カエラレマス
オレエニ　マイオ　イタシマショオ　デモ　ソノ
ハゴロモガ　ナイト　マウ　コトガ　デキマセン
トイっテ　ハゴロモオ　オカエシ　シタラ　アナタワ
マワズニ　カエっテ　オシマイニ　ナルデショオ　イイエ
テンニンワ　ケっシテ　ウソオ　モオシマセン　アア
ハズカシイ　コトオ　モオシマシタ　リョオシワ
ハゴロモオ　カエシマシタ　テンニンワ　ソレオ

百三十九頁

キテ　シズカニ　マイハジメマシタ‖

ツキノ　ミヤコノ　テンニンタチガ　クロイ　コロモノ

ソロイデ　マウト　ツキワ　マっクロ　ヤミノ　ヨル‖

百四十頁

ツキノ　ミヤコノ　テンニンタチガ　シロイ　コロモノ

ソロイデ　マウト　ツキワ　ジュウゴヤ　マンマルイ‖

百四十一頁

テンニンワ　マイナガラ　ダンダン　テンエ　ノボっテ

イキマシタ‖

ミギニ　ヒダリニ　ヒラヒラト　ウゴク　タモトノ

ウツクシサ‖　シロイ　ハマベノ　マツバラニ　ナミガ

百四十二頁

ヨセタリ　カエシタリ‖　イツノ　マニヤラ　テンニンワ

百四十三頁

ハルノ　カスミニ　ツツマレテ　カモメ　スイスイ

トンデ　イク　ソラニ　ホンノリ　フジノ　ヤマ‖

〔甲〕

（イ）發音　ミオノマッバラ、人によつてはミホともいふが此處はミオを採る。マウ（百三十八頁三行、モオとはいはない、現代の口語の發音による。

（ロ）アクセント　續き下りの例、フジノヤマ、デテキマシタ、カカっテイマス、ミタコトガ、ナイモノデ、カエルコトガ、アリガトオゴザイマス、ハズカシイコトオ。

續き上りの例、シテキマシタ、オモチニナルノデ、オカエシクダサイマセ、オシマイニナルデショオ。

アア、アクセント不定。オヤ、アクセント不定、但し此處は平板式の様にいひ、尻上りの調子にいふのが良い。モっテカエっテ、モっテクルと同じく常に續けて此の型でいふ。「持つ」といふ意義を特に強くいはうとする時はモっテといふが、此處はその必要が無い。マツノキ、

常に續けて此の型でいふ。「葉ではない木である」などと「木」を強める時はマツノキノといふが、此處はさうでない。タカラモノニ、又はタカラモノニともいふ。ナオサラ、又はナオサラともいふ。マウコトガ、又は續けてマウコトガ。イツノマニヤラ、又は續けてイツノマニヤラ。

〔乙〕

(イ) **斷續**　本文表記の外、始めの歌から本文(『一人のれふしが……』)移る堺は十分に休止を置くこと。其の他の課全體として靜かに落附いていふ必要上、休止を十分注意するのがよい。本文表記の『|』この符號はその一案である。天人と漁師との問答の堺目は休止を置かない方がよい。暫く考へてから問を出し又は答をいふなどの事が無いからである。散文から韻文へ、又はその逆に移る堺は十分に休止を置くのがよい。

(ロ) **速度**　全體として成るべくゆつくり靜かにいふ。『もし、それは……』(百二十四頁五行)の如き、稍急いで留めようとするのであるが、天人の言葉として餘り速くいふのは適當でない。『いや、いけません……』(百三十六頁四行)は稍速くいつて良い。

(ハ) **抑揚調子**　『あゝよいお天氣だ』の「あゝ」を強める。『何といふ』を強める。『けしきだらう』の終は尻下りの調子。『おや』は尻上りの調子。『何だらうな』の終は一べん上つて直下る調子、又は單に尻上りの調子でもよい。『お持ちになるのでございますか』の終は輕く尻下りの調子にいふのが良い。語氣を強くして詰問する樣に聞えては良くない。『拾ったのです』の方を強める。『なほさら』を強める。すべて天人の言葉は柔和な調子でいふこと。『見せて下さいませんか』の終は尻下りの調子。『かへっておしまひになるでせう』の終も尻下りの調子。

昭和四九年十二月三十九日發行

小學國語讀本朗讀法(全四冊)【定價壹圓參拾錢】

著者　神保格

發行者　東京市麴町區下六番町四十八番地　岡本正一

印刷者　東京市牛込區山吹町三丁目百九十八番地　山本瀨男

印刷所　東京市牛込區山吹町三丁目百九十八番地　宗文社印刷所

發兌　東京市麴町區下六番町四十八番地　山海堂出版部　厚生閣

振替口座東京二六〇二〇番

東京文理科大學教授 神保格著

小學國語讀本朗讀法

〔全二冊續刊〕好評

ラヂオにレコオドに、全國に規範的標準を與へ、絶對權威を高めつゝある著者の唯一の小學アクセント指導書！正しい意味の把握は、正しいアクセントから！アクセントなら先づ本書を!!

菊版洋裝

〔卷一〕二十版 價八十錢 送料十錢
〔卷二〕十八版 價九十錢 送料十錢
〔卷三〕十二版 價一圓十錢 送料十錢
〔卷四〕以下續刊

☆正しい發音は美しい發音！

アクセント【別卷】指導書

尋三以上の現行讀本には同じ著者の「尋常小學國語讀本發音とアクセント」を

尋三 定價一、九〇 送・一四
尋四 定價二、〇〇 送・一四
尋五 定價二、一〇 送・二二
尋六 定價二、二〇 送・二二

東京高師教授 石山脩平著

辨證的教育學

菊判洋布裝 三百三十頁 索引附函入

定價二圓九十錢 送料二十二錢 【最新刊】

辨證教育學は、私にとつては、唯一の眞實の教育學である。それは教育の本質も目的も段階も方法も辨證的見地によつてのみ眞に把握し得られるとの信念の下に、是等諸問題を一貫せる立場より整合的に取扱へる教育學體系である。（中略）本邦教育界の定めなき流行に飜弄せられぬためには、靜かに深く教育永遠の使命を考へねばならぬ。時流の急迫に空しき焦燥を繰返さぬためには、中正にして强靱なる實踐力を把握しなければならぬ。〈著者〉——と。以て本書の眞價を知るに足る。

教壇に於て實踐し得る限りの强靱なる迫力を持つた最初の教育學！新時代に適應した眞實なる最新教育學だ

〔內容抄〕—緒論辨證的教育學の意義及び組織—第一篇辨證的教育本質論（序說教育の本質とその求め方・第一章教育の基調としての愛・第二章教育の本質の諸相）—第二篇辨證的教育目的論（教育の目的とその取扱方・陶冶理念・陶冶理想・民族國家と陶冶理想）第三篇辨證的教育段階論（序說・緒論・第一章・種發達及び教育段階の意義とその取扱方・第二章教育の段階）—第四篇辨證的教育方法論（序說・教育の一般的方法としての辨證法・第一章辨證的教授論・第二章辨證的訓育論）

丸山林平著 國語教育學 價四・四 送料二・二〇

佐藤木々齋 秀榮 共一治著 生活轉體的教授原論 價三・三 送料二・二〇

實際教育界の疑義を明る

▼所謂理論書の迂遠と晦澁と單なる詳案式

●指導書の月並に呆れし人々よ、來れ！

▼來つて本叢書の完全なる明解と適切にして該博なる斯界一流權威者の實際研究に聽け！

【各冊自由分賣】

修身科教育問答	東京高師訓導 川島次郎先生著
讀方科教育問答	東京高師前訓導 宮川菊芳先生著
書方科教育問答	東京高師前訓導 水戸部寅松先生著
綴方科教育問答	東京高師前訓導 千葉春雄先生著
地理科教育問答	東京女高師訓導 齋藤英夫先生著

この叢書は、現代の實際教育界に潛伏してゐるあらゆる疑問を摘出し永解させるべき目的を以て生れ出た。わが編輯部は先づ全國的に實際家の最も疑問とする點につき全十五教科に亘つて問題を蒐集した。して、その總數殆ど一萬に達する質疑を得それらを實際教育について最も權威ある諸大家に囑し嚴選の上一教科に就き凡そ二百問前後に約し、最も一般的な、しかも重要にして必須の問題のみを殘し、それらに對して明快整然たる解答を附して貰つたものである。その解答擔任の諸大家を網羅してゐる點など、在來のこの種のあらゆる指導書などの群を拔いてゐると信じる。本叢書出でて、現代の實際教育界から永年の暗影は忽ち委を潛めて了つたと稱しても過言ではない。時代の新教育陳容に據りて颯爽として雄飛せんと欲する人々に、心から捧げる。刷げくば、一書を座右にして、日々の生活に大なる確信を以て臨んでいただきたい。發賣以來全國的に實に大きい反響を與へつつある。

解せる新百科叢書成る

國史科教育問答	廣島高師訓導 大久保馨先生著
理科教育問答	東京高師訓導 堂東傳先生著
圖畫科教育問答	廣島高師訓導 大竹拙三先生著
唱歌科教育問答	東京高師訓導 齊柳善吾先生著
手工科教育問答	東京女高師訓導 山形寛先生著
體操科教育問答	東京高師訓導 齋藤董雄先生著
裁縫科教育問答	東京高師女訓導 田原美榮先生著
家事科教育問答	東京女高師 佐々木君代先生 高橋ちき先生 共著
劇とお話教育問答	長尾豐先生著

各冊四六判二八〇頁内外 ポプリン裝函入

別價 算術科教育問答 東京高師前訓導 稻次靜一先生著（六一〇頁）價二圓九十錢 送料十八錢

全十五冊 價 右掲出十四冊 各二圓（送料十四錢）

千葉春雄先生著

最近の文學・文章研究と國語教育

菊判美裝 上製定價二圓五十錢 送料十八錢
並製定價二圓三十錢 函入四七〇頁 函ナシ

★文學文章の大講座！國語教育今日の食餌、明日の指標！「現代の文學とその方向」、「明日の文學」、「現代の文章とその方向」、「明日の文章」その他の系統的組織的大研究、文壇權威新進總動員！

東京高師 宮川菊芳先生著

現代讀方教育の實相と批判

菊判布裝 定價三圓六十錢 送料十八錢
函入四一二頁

★現代讀方教育の實相と大勢とを展開して、その取扱へる分野の廣さと、研究の深淵なのとはその比類を見ない。精緻な經驗と論理との篩を通して著者一流の讀方の本質觀を確立したものが本書である

東京高師 宮川菊芳先生著

讀方教育の鑑賞

四六判布裝 定價二圓 送料十四錢
函入二四〇頁

★著者の持説たる讀方鑑賞教育の立脚點を闡明したもので、特に本著は藝術の本質を遺憾なく研究したものである。韻文教材の價値批判より始まつて、文藝の創作とその鑑賞のすべてを詳説してゐる。

東京高師 宮川菊芳先生著

態度馴致の讀方教育

四六判布裝 定價二圓六十錢 送料十四錢
函入四三〇頁

★正しく文を讀み、正しく考へる態度、正しく鑑賞する態度、それらを如何にして指導するかを具體的に説いてゐる。宮川氏は常に對象の眞の姿を見極める爲に虔心を抱く、その面目躍如としてゐる。

廣島高師 佐藤德市先生著

國語の本質とその教育

四六判布裝 定價二圓六十錢 送料十四錢
函入四一〇頁

★鑑賞論が提唱されて以來、この方面の研究は他方に文學それ自身によつて文學をみる批評精神への展開を要望した。佐藤氏の本著は文學論としての國語の本質を論じ盡し文學批評の新精神へ飛躍した

森本安市先生著

辨證法的讀方教育

四六判洋布裝 定價一圓八十錢 送料十四錢
函入三三〇頁

★形象の讀み方教育から辨證法的讀み方教育へ！ 今や國語教育界は辨證法に新しい關心と激しい熱意を持たんとしてゐる。斯界に先驅し明日を約束するものは唯本書あるのみ！ 斷然讀方教育の新潮

神保格 常深千里 兩先生著

國語發音アクセント辭典

三六判總革裝 定價二圓五十錢 送料十四錢
函入五五〇頁

★國語發音の擁護確立！ 解説附決定版標準發音にする日用語三萬の全的把握！文部省の委囑を受け・此ことの爲に全面的研究を續けて來た著者の大業・玆に完成さる。本邦最初の國語標準發音辭典

東京文理大教授 神保格先生著

發音とアクセント

等常小學國語讀本の菊判布裝函入

二〇〇頁	尋三用	定價一圓九十錢
二二〇頁	尋四用	定價二圓
二五〇頁	尋五用	定價二圓十錢
三〇〇頁	尋六用	定價二圓二十錢

送料各十四錢

★正しき日本語の確立、健全なる現代語の指導、正確なアクセントの指導、讀み振り朗讀法の手引等のために初めて現れたる大著である。標準語の學的決定と國語教育の新研究とには不可缺の書だ！學年別六册何れも既に好評嘖々たる名著

東京高師 千葉春雄先生著

生活に即く讀み方（特に低學年の讀み方）

四六判布裝 定價二圓六十錢 送料十四錢
函入三七〇頁

★讀み方教育は行詰つたといはれてゐる殊に低學年の讀み方は、摩だけで實が擧らないとも云はれてゐる。しかし本書は雄壯にさうした憂ひを否定してゐる。實際指導の詳述にすべてを盡してゐる。

KOSEI KAKU・KOSEI KAKU・KOSEI KAKU・KO

形象の讀み方教育

廣島高師 佐藤德市著

菊判三五〇頁布製函入
定價 二圓九拾錢
送料 二十七錢

本書は、大正の中頃以後擡頭した新興讀方の正體を見究め、そこから、今後の讀方が如何に展開して行くべきかといふ斷史的必然を明らかにしてゐる。新興讀方は初期に於て生命の讀方教育となつて現れ、心詞の一元一體であることを發見した。ここに於て、讀方教育は主情的・主觀的傾向が高調されるやうになつた。その結果生命の讀方はいつのまにか文に於ける客觀的なものを否定してしまつた。又、その方法論に於ても鑑賞とか直觀とか主觀的なもののみに重きをおき、客觀・分析などの點に於て大いに缺如するところがあつた。

本書は、それら心と詞の渾然合一を高唱し、生命の讀方は當然形象の讀方教育に進展すべきである事を明らかならしめたものである。

內容目次抄

心情要事物三者の關係を論じて國語教育に及ぶ・心と言葉の二元對立觀より心卽言葉の一元觀へ・新興讀方功罪論・生命の論理・形式の論理・文に於ける客觀的なるもの・文意構造論・讀方の論理・讀方指導過程・感情の文と指導過程・兩者融合の文と指導過程・讀みの展開と文意の直觀・讀みの展開と文意の自證・形象の直觀・形象を讀む指導の展開・讀方指導の研究・國民教育と國語教育との關係等。

同じ著者によりて

國語の本質と其の教育　定價 二圓六〇錢　送料 一八錢

生命の讀方教育　定價 三圓四〇錢　送料 二七錢

KOSEI KAKU・KOSEI KAKU・KOSEI KAKU・KO

廣島高等師範訓導 佐藤德市著

菊判洋布裝 函入三五〇頁　定價 二圓六十錢 送料二十二錢

新刊

辯證法的解明 讀み方教育の新機構

社會的現存としての文を辯證法の立場により科學的に解明し茲に新しく動的聯關的にありとする語の實用的讀み方教育を宣揚提唱す

生命の讀み方から形象の讀み方へ！ その第一旗手として赫々の功績を擧げて來た著者は今茲に新しい社會に適應せしむべく、主客聯關の語の動的讀み方教育を提唱する。新しい讀み方教育の金字塔だ

☆整然充實の內容☆

第一篇 序論
第一章 讀み方教育何處へ行く
第二章 來るべき時代の讀み方に與へられたるもの
第三章 讀み方教育の新機構
第二篇 本論
第一章 讀み方教育の根柢に横はる大問題
第二章 文と語
第三章 語を優位とする讀み方教育
第四章 文を優位とする讀み方教育
第五章 形象の讀み方固有の領域
第六章 形象の讀み方に對する從來の解明法
第七章 文と語の性格並にその連關について
第八章 表現の辯證法
第九章 理會の辯證法
第十章 教材觀の三つの類型
第十一章 生活と論理
第十二章 指導過程は何が決めるか
第十三章 形象と理會
第十四章 辯證法的讀み方の指導過程

形象の讀み方教育　價二・九〇 送一・八

佐藤德市著

辨證的日本精神への讀方教育

吉田義則著

四六判洋布裝 函入三六〇頁

定價一圓八十錢 送料十四錢

辨證法—それは讀み方教育の持つ最も新しい且つ最も正しい方向！日本精神—それは民族主義教育の宣揚を示す清新適確の新讀み方！

生きた讀み方教育を實踐せんがために、著者は鋭意研鑽多年、こゝに初めて、その眞摯なる研究を社會的歷史的な具體的精神表現としての民族的國語教育に高揚樹立した。讀み方教育の眞の目的に徹し之を擴充する爲に捧げられた此恐るべき新教育人の素晴らしい躍進的記錄を見よ

【内容抄】**第一章辨證的日本教育の目的**（現代教育の意味深く推移・日本精神研究の種々相・社會的歷史的日本體驗流・小學校令第一條の吟味・辨證的日本教育の目的）**第二章國語愛卽國家愛の教育**（言語及び國語の意義・日本語の迷信・國語の社會性・國語愛卽國家愛の教育・教則の沿革とその吟味・教則第三條の批判）**第三章辨證的日本教育の材料**（教材の意義及び教材觀・世界の語族と日本語・日本教育と國語の特質）**第四章大和魂を有つ教材の研究**（奇魂を有つ教材の研究・荒魂を有つ教材の研究・和魂を持つ教材の研究・幸魂を有つ教材の研究）**第五章日本精神と國語の形式**（音聲上の日本精神・語彙上の日本精神・語法上の日本精神・我が文字と日本精神）**第六章自然的讀方教育の提唱**（自然的方法の意義・日本教育と自然的方法・國語教育と教師論）**第七章自然的讀方教育の實際**（自然的假名指導の實際・自然的漢字指導の實際・日本精神と特殊語の研究・辨證的日本教育の實踐・自然的讀方指導の行程）其の他

新刊　辨證法的解明　**讀み方教育の新機構**　佐藤德市著　價二・六〇　送・一四

十三版　**形象の讀み方教育**　佐藤德市著　價二・九〇　送・一八

初原段